

超ホワイトで過保護な
提督が着任しました。
リメイク版

シデンカイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは提督が艦娘と仲良く平和に過ごしていく物語です

新人の提督がどんな事を考えてどんな事を決めてどんな事をするのか暖かい目で見守ってくれると嬉しいですね。

いくつかの感想で読みづらいとの意見を聞いたので思考を（）会話を「」に決定しま

した

ブラック鎮守府とブラック提督は存在しませんよ。

けどネタ切れにならない限りは完全に停止じゃないので安心してください

目次

第1話	1
第2話	12
第3話	18
第4話	27
第5話	39
第6話	46
第7話	61
第8話	70
第9話	79
第10話	85
第11話	90
第12話	99

第13話	107
第14話	115
第15話	120
第16話	126
第17話	135
第18話	143
第19話	148
第20話	152
第21話	157
第22話	161
第23話	166
第24話	170
第25話	174

第38話
第37話
第36話
第35話
第34話
第33話
第32話
第31話
第30話
第29話
第28話
第27話
第26話

243 236 230 225 220 214 207 202 196 192 187 183 179

ケ
ツ
コン
・
カツ
コ
カリ
(B
ルート)

253

ケ
ツ
コン
・
カツ
コ
カリ
(A
ルート)

247

第1話

私の名前は戦艦艦長門だ。この鎮守府では1番の古株であり、この鎮守府は艦娘の人数がまだ少ないからだ)

(なぜなら私を入れてまだ2人だけと言うからな)

(これから私は新人と言われている提督を迎えに行かなければならないので失礼する)

(はたしてその新人と呼ばれている提督とは、どんなヤツなのか見物だな)

(私は見極めなければならない)

(その提督が、どのような人間なのかを……中には艦娘に暴力や無理矢理に性的な行動をさせたりする輩もいるぐらいだから、注意しなければ……)

(私達は第2の人生を歩む事が出来た)

(艦としての頃は人間みたいに食事とかはしていなかったからか見た目は人だからか、やっぱり食事には気になるし興味もあるし楽しみでもある)

(平和に過ごせるように生き続けていきたいものだ)

(今日からこの鎮守府に着任する事になった俺こと坂上瑞は鎮守府からこちらに迎えに来るって話を聞いたので待っていた)

(少し早く着きすぎたかな？ つと思っていたら向こうから誰かが歩いてきた)

(誰だろうか？ そう思つて俺は歩いて来た人に話をしてみようと思つて俺は自然と歩いてその人に近づくように言った)

「あなたが迎えに来るつて言う人ですか？」

(俺は気になったから話をしてみた)

「そうだ。私の名前は長門型1番艦の長門だ」

(向こうから歩いて来たその人物は長門と言う名前の人だった)

(確か長門って最後はアメリカの核で沈んでしまったんだなと記憶していた自分がいる)

(その長門と同じ名前なんて……いや同じ名前の人なんて世の中には腐るほどいるから1人2人は同じ名前の人いても驚きは、しないな)

(まあ今は案内をしてもらわないとな)

「それじゃあ俺も自己紹介をしないと、俺の名前は坂上瑞穂だ。よろしくな、長門」

(そう言いながら俺は長門に握手をしようとして手を出した)

(この人物は坂上瑞穂って名前なのか、私から見る印象は身長が170ぐらいの痩せていて真面目そうな感じだな)

(なんだ？名前を言い終わったら右手を出してきた？ああ握手か？それならいいだろう、私もよろしくなと言いながら相手の握手に答えた)

「さて挨拶もしたから今から鎮守府の案内をして欲しいんだけどお願い出来るかな？」

「わかった。なら私の後を付いてきてくれ」

（しばらくして歩きながら説明していると反対側から高雄が来た）

（高雄は私以外に一緒にいる人物が気になったのだろう、話しかけてきた）

（私は長門が迎えに行つた後に自分で考えていた）

（どういった人なんだろう？まず気になったが、そろそろ戻ってくるかなつと思ひ掃除が終わってキレイになった執務室を出て歩いていると向こうから長門と長門以外に後1人いる。あの人が提督なんだろうなつと私は考えて話かけてみた）

「初めまして私の名前は高雄型1番艦の高雄です。よろしくお願いたします」

「初めまして俺の名前は坂上瑞穂だ。よろしくな」

(どうやらこの人は高雄つて名前の人らしい。見た目は長門と一緒に大学生ぐらいかな？っと思う人物だった)

「さて2人に聞きたいんだけどこの鎮守府では俺達3人以外にもいるのかな」っと思
てみた

「いや？これで全員だ。まだ誰もいないのでな」

「なら仕方ないよね。それじゃあ俺のやり方を言うからちゃんと覚えといてくれ」

「1つ↓資材に余裕がある時は敵の攻撃に当たったら帰ってこい」

「2つ↓資材に余裕が無い時は小破したら帰ってこい」

「3つ↓戦ってる内に進むか戻るか考えている時は進まずに戻ってこい」

「4つ↓誰かが中破・大破したら全員一緒に帰ってこい」

「5つ↓中破・大破したにも関わらずそれでも戦おうとする人は解体するからそのつもりで」

「6つ↓俺が鎮守府に完全に、いないと、わかっている時は秘書官が俺の代わりに提督としての全権を使っても構わないから指示をしろ」

「7つ↓俺が、いるには、いるが、どうしても判断を下せない時は俺の代わりに秘書官が指示を出しても構わない」

「8つ↓緊急事態が発生した時に俺がいても、いない時でも俺が指示を出せない時あるいは俺がいても、緊急事態だから聞いている余裕が無いって時は秘書官が指示を出しても構わない」

「いいか？このルールを絶対に守ってくれ」

「俺は、お前達を沈ませたくないんだ。生きて帰ってきてほしい、俺の願いは、それだけだ」

（提督が私達の人数を聞いた後に話かけてきた）

（それは提督のルールだった。私と長門の2人は聞いていて思った）

（この人は艦娘を大切にする人なんだなっと少しわかった気がした）

（私達の今いる人数を聞いた後に提督は自分のやり方・・・ルールを言ってきた）

（8つあったが、どれも私達の事を考えて言ってくれたのだと気づいた）

「俺としては沈ませない為に考えて見たものだ」

「俺は、お前達と仲良く平和に1日1日を過ごしたいんだ」

「俺の考えに不満がある、俺のやり方に納得がいかない、そういった人が出てきたら誰でもない躊躇わずに俺を撃て」

第2話

「長門ちよつと今から頼みたい事があるんだけどいいだろうか？」

（私は提督に呼ばれたので振り替えて近づいて行く）

（そして私が提督に聞こうとした瞬間に高雄が執務室に入ってきた）

（私は執務室の掃除が終わった後に休憩をしていた。今は提督を抜けば私達2人しかないのだから今やるべき事が実は結構ある）

（食事を作ったり部屋と食事とかの掃除とお客様が来た時の対応、警備の対応と考えれ

ば考えるほど悩み事は出てきてしまいます)

(その事を今の内に決めておかなければと思い、私は執務室に向かいました)

(そしてノックを3回した後提督が、どうぞと言ったので中に入ると長門が提督に何かを聞こうとしていたのか話しかけようとしていました)

(俺は長門を呼んだ後に今後の事について話そうと思っていた)

(なぜなら俺を抜けば長門と高雄の2人しかいないのだから、俺は執務室で仕事をする以外に実は料理を作っている)

(少しでも2人の負担を減らしてやりたいからっと思っただけで作ってみた)

(2人が俺の作った料理を食べた後に、こう言った)

「長門↓うまい」

「高雄↓おいしい」

(他人に食べさせた事なんて実はコレが初めてだから少し……いや、だいぶ不安だった)

(少なくとも料理が作れる人が来るまでは俺が作らないとな……つと話が、それだな)

(俺が長門を呼んで今、話をする事は人数について聞きたかったからだ)

(さすがに2人・・・俺を入れて3人かキツすぎる)

(そこで俺は長門に話をしようとした瞬間にノックの音が3回聞こえた。誰が来たのかは姿を見なくてもわかるものだ)

(俺は、どうぞつと答えて高雄を執務室に入れた)

(私は提督に言う前に近くにいた長門に今、話をして大丈夫かを聞いてみたら大丈夫だと言ったので私は話をする)

（私は提督の顔を見ながら話をした）

「話の内容は今現在の内容と人数についてです」

「提督も協力してくれていると言っても3人ではどうしても出来ない場所とかが、あるからです」

その事について私は話をしてみた。

（高雄が俺に今、現在の話をしてきた）

（俺は黙って高雄の話を聞いてみると確かにそうだなっと思いつつも話の数多く出て

きた)

(今の高雄の話は間違っていないし正しい事だっただけだから俺は聞いている)

(私が今、現在の話を話していると提督は黙って聞いていました)

(本当は提督も話してきてくれると嬉しいのですが、ちゃんと私の話を聞き逃さないように聞いているので私としては嬉しいです)

(そして私は提督に話さなければならぬ事を話、終わりました)

第3話

(高雄の話が、どうやら終わったみたいだな。さてと……数多く出てきた話の中で今の重要な事は人数不足だろうな)

(よし、そうと決まれば高雄に頼むとしよう)

「高雄、俺は今、お前の話を黙って聞いてみてが、今お前が話したものは間違っていないしどれも正しい事だ」

「そこでだ。高雄、今からお前には建造をしてきてもらいたい」

（建造？まあ建造すれば艦娘は確かに増えますが資材は大丈夫なのでしょう？私は、まだ聞いていなかったので提督に聞いてみました）

「提督、資材は大丈夫なんですか？」

（俺は今、高雄に資材は大丈夫なのか？つと聞かれて俺は念の為に机の中にあつたメモを取り出した。実は俺は自分のメモに前もって書いていたのだ）。

（そして書いていた自分のメモを高雄に渡して見せる）

「資材は大丈夫だから高雄、資材は気にせずに建造してくれ」

「わかりました。今から建造してきます。失礼しました」

（高雄が、わかりました。今から建造してきます。失礼しました。つと言つて執務室を出ていった）。

（建造すれば資材は減るが俺が、いる鎮守府は人数不足で、どこも手が足りないのは、わかっていたからな、俺は今回の建造で誰が来るのかを思うのだった）

（高雄が提督に今現在の話をしていた時に私は提督を見ていた）

そして提督は高雄に資材を気にせずに建造するようにつと言つたので私は正直驚いた。

（気にせずに建造つて言えば聞こえは、いいかも知れんがコレからの事を考えて言つて

いるのだろうか?」

(しばらくしてから高雄は執務室を出ていった)

(私は資材の事で気になったので提督に話をしてみた)「資材を気にせずに建造つと言ったが、そんな事をしたらこの先が困るだろう」

(私は提督に話をしてさっきの疑問を言ってみたが提督は何も答えずに私の顔を見ていた)

「確かに私達の鎮守府は人数不足な事については知っている。しかし資材を気にせずに建造なんてしたらすぐに資材が無くなって、まともに補給が出来なくなってしまう」。

「その所を考えているのか?」

「私に聞かせてくれないか？」

「確かに長門の言う通り、資材を気にせずには建造で使ったりすると、まともに補給が出来なくなるよな？」

「でもな、このまま3人で過ごしていくんじゃダメだ。」

「敵が、もしこの鎮守府を襲って来たらお前達2人だけで守れないだろ？」

「仮に戦えたとしても長門と高雄が戦ってる最中に俺が死んでいる確率の方が遥かに高いんだからな」

「常に死と隣り合わせとは言え俺は死にたくない。生きていたい」

「そしてその先にある平和になった未来が見たんだ」

「その為にも俺は高雄に頼んだまでの事」

「どうだろう長門？お前から見て俺のやり方は……」

（提督が自分で考えていた事を私に言ってきたので私は私なりに考えていた）

「なるほど、確かに、この鎮守府が敵に襲われたら戦えるのは私と高雄の2人だけだな」

（それに戦ってる最中に提督が死んでる確率が遥かに高いから、そう考えると今は仕方ないのかも知れない）

「……そういう事か、だが消費した資材は、どう増やす？」

「資材は常に減るのは早いが増やすのは大変だぞ？」

「確かに長門、お前の言う通りで資材は常に減るが増やすのは大変だな」

「しかし人数不足を何とかすれば俺に考えがある」

「人数が揃えば一緒に戦えるしな」

「今は地盤を固めて守りに専念しないと」

「まずは高雄が建造で誰を連れてくるのか？それを一緒に待ってみようじゃないか」

（提督は考えが、あるって言ってたが人数が揃ったら何をさせるんだろう）

（まあ気には、なるが今それを言っても仕方ないからな）

この提督は私達の事を考えながら行動しているっていうのは安心感が、ある。

俺は提督で長門達みたいには戦えないから俺は俺の出来る範囲でサポートしたいと思っ
思っている。

その為にも今は

第4話

私は提督に建造を頼まれたので建造をしました。

そして建造で新しく来た人数は6人だったので私は提督が、いる執務室に向かつて6人の艦娘と一緒に歩いていきました。

私の後ろから6人とも私に付いてきてくれました。

歩いていると執務室に着いたので私はドアを3回ノックして中からどうぞつと声が聞こえたので失礼しますつと言いながら私は私の後ろから付いてきている6人を執務室の中に入れました。

俺は仕事を再開し続きを始めた。それからしばらく時間が建つとノックの音が聞こえた

高雄が戻ってきたのだろうと思ひ俺は、どうぞと言った。

すると失礼しますって言いなから高雄が入ってきたと思つたら高雄が自分の後ろにいる人達に何かを言っている。

声を聞くと1人じゃない・・・数人いる事に気付く俺は待つていた。

そして高雄が入った後から6人の艦娘が入つて来た。

このまま黙つてる訳にもいかなから俺は立ち上がつてあいさつをした。

「みんな、良く来てくれたな。俺の名前は坂上瑞穂だ。提督と言っても新人なもんで新人ゆえに不安かも知れないが、よろしくな」

「さて今度は、みんなの事が知りたいから、みんな自己紹介をしてくれないか？」

「私は特型駆逐艦の1番艦、吹雪です。よろしくお願いします」

「鈴谷は最上型重巡洋艦の3番艦。鈴谷だよ。よろしく」

「暁型 4番艦 駆逐艦
電なのです」

「白露型駆逐艦の4番艦、夕立です」

「軽巡洋艦、天龍型2番艦の龍田よ」

「私は超弩級戦艦、扶桑です。」

俺は6人の自己紹介を聞いた後は高雄を呼んだ。

高雄すまないが今から、この6人に鎮守府の案内をしてくれないか？

それが終わったら6人にどの部屋を使うのかを決めてもらってくれ。

これが、そのカギだから高雄お前に渡しておくよ。

それが終わったら高雄は執務室に戻ってきてきてくれないか

後の6人は夕飯までは自由行動だ。

「わかりました。それでは失礼します」

みんなは私に付いてきてください。今から案内します。

(そうして私は……いいえ私達は執務室を出ました)

(私は後ろから付いてくる6人に案内しながら話をしようとしてみる)

みんな、どうでしたか？ここの提督は？

「私は、そうですね。見た感じは良さそうだなって思いますよ。中身(性格)が気になりますよ」

「鈴谷は何か頼りに無さそうに見えて頼れそうな感じかな。良くわからないけど」

「私から見る司令官は……わかりませんね。やっぱりちゃんと話さない事には」

「夕立も吹雪ちゃんと一緒に話してない事には何とも言えないけど気にはなるかな？」

「電は、いい人かなって、思うのです」

「私は優しいとは思うが不安には、なるね。自分でも新人って言ってたぐらいだからね。新人って事は覚える事が沢山あるって事なんだからさ」

（提督と、ちゃんと話をした訳では無いので以外と悪くは思われてないから今は、ひと安心です。）

みんな、ここが部屋になります。

この鎮守府は、まだ人数が少なくて提督を抜いて長門と私の2人しかいませんでした。

しかしみんなが来てくれたおかげで人数が増えて私は……いえ私3人は嬉しいです。

「ちよつといいかしら？今3人と言ってましたが私達が来るまでは、どうしていたんですか？本来いるはずの秘書官とか見ませんでしたか……」

「まず秘書官ですが、この鎮守府に秘書官は、いません」

さつきも言いましたが提督を抜いて2人で提督を入れて3人だったので私達は2人は掃除や回りの片付けなどを

提督は執務室で仕事をしながら料理を担当していました。

秘書官を決めてる時間も無かったので提督が1人で秘書官の分を含めて仕事をして
います。

「そうでしたか……確かに人数が少ないと出来る事に限り、ありますね」

「なら夕立が秘書官に立候補するっぽい」

「秘書官については、まだ話してないので夕飯の時に提督に聞いてみましょう」

「けど秘書官いないと言つても秘書官の分も含めて提督は仕事をしているんなら鈴谷は秘書官じゃないにしても手伝うよ。」

そうじゃなきゃ倒れちゃうでしょ。」

「確かにそれは言えていますね」

しかし最終的に決めるのは提督で、あつて私達では無いから私達は提督が言うのを待ちましょう。

「そうですね。けど司令官が気になりますか・・・」

「吹雪ちゃんは提督が気になるっぼい？」

「まあ気になりますね。」

「私達が来るまでは3人と言っていましたし。」

提督が仕事をしながら料理をするって言っていましたから提督の負担は、かなり、あるんじゃないかなって

それじゃあ、みんなにカギを渡しますね。 . . . はい。これで夕飯までは自由行動です。

何かわからなかったり気になった事が、あつたら執務室に来てください。

それじゃあね。

第5話

まさか6人も増えるとは思わなかったから俺は驚いていた。

資材は減ったが、しかし6人も増えた事によつて出撃が出来るようになった。

だがその前に訓練しなければならぬから、まずは誰を訓練させるかで迷うな

さてと今日は歓迎会でもしてやるかな？と思つたら執務室の電話がなつたので俺は執務室の電話に、でていた。

「はい………そうですが………はい………はい………わかりました。あ

りがとうございます。では失礼します」

何の電話かと思ったら明日また何人か新しい人（艦娘）が来ると聞かされた。

歓迎会は明日にした方が良さそうだなっと思いながら仕事を始めた。

（私は高雄達が執務室から出たのを確認してから提督の顔を見たら提督は喜んでいた）

なぜ喜んでいるのかって言うとな人数が増えたからって事も、あるが出撃も出来るようになったからだ。

しかしこの提督の事だ。

このままで、いるはずが無い。

何かしらの事を考えて決めようとしているはずだ。

なぜなら……この提督は過保護だからな。私達を大切にしてくれるのは嬉しい。

だが同時に不安でもある。

もし戦っている中で誰かが沈んでしまったらこの提督は、どうなってしまうのだろうか？

辞職してしまうのだろうか？

自害してしまうのだろうか？

考えれば考えるほど、わからなくなる。

提督の事だ。

ちやんと誰かを呼んで話をするだろうかから特に大丈夫だろう

「長門ちよつと悪いんだが俺の所に来てくれないか？」

さつき執務室の電話が鳴っていたのに気付いていると思うが明日は大本営から、この鎮守府に数人また新しく来るみたいでな

長門、悪いが明日のヒトフタ、マルマルに迎えに行つてくれないだろうか？（提督が私に言つてきたのは、また新しい艦娘が来るつて話だった）

時間はヒト、フタ、マルマルだった。

しかし私には、まだ聞いておかなければ、ならない事が、あつたので提督に聞いてみた。

「明日また新しい艦娘が来るのは、わかった」

しかし何人ぐらい来るのだろうか？

私達全員で出迎えた方がいいのか？

長門が俺にわからない所を聞いてきたので俺は長門の話聞いて答えた。

「人数に、ついては知らない」

出迎えについては長門だけで大丈夫だ。

他にまだ聞きたい事は、あるか？

(提督が私の聞きたかった事に対して答えてくれた)

人数は、わからなくて私だけでいいとは

私だけつでいいって事は来る人数は多く無さそうだな。

「いいや？もう私が聞きたい事は無いな」

「それじゃあ残りの仕事を片付けたら明日の準備をしようか」

準備をする時は言うからその時は長門・・・・・・・・いろいろと手伝ってくれ

第6話

(私は今、新しく来る艦娘達を待っている)

しばらくすると向こうから5人の艦娘が来たので私は歩いていった。

すると向こうも私に気付いたみたいで私に近づいてくる。

「私の名前は戦艦長門だ」

今日のヒト、フタ、マルマルに来た者達か？

私達は今日のヒト、フタ、マルマルに行くように言われて今日、着任した艦娘です。

(やはりそうだったか)

(だがコレで後は提督のいる執務室に連れて行って話をしよう)

「なら今から提督のいる執務室に案内するから私に付いてきて欲しい」

私はそう言いながら執務室に向かった。

(俺は今、長門に迎えに行ってもらっている。その間に俺は歓迎会の準備をしていた)

仕事？それなら、さきほど終わったんでな。

新しい人達が来るつとは聞いたが何人ぐらい来るかは聞かされてないから俺は念の為にいつもよりも多くの料理を作るように準備をしていた。

夕飯までに間に合わせないといけないからな。

さて下準備は出来たから後は時間になったら食堂に行つて作り始めるとするか。

今は執務室に戻らなければ

しばらく時間が過ぎて、俺は執務室に戻ってきてから自分でお茶を入れて飲んでいた。

俺はコーヒーよりも、お茶の方が好きだから毎日お茶を飲んでいる。

体にもいいからな。

お茶を飲みきって片付けをしようと思ったらノックの音が聞こえた。

きっと長門だろう。昨日は俺が長門に頼んだ事だから執務室に向かってたんだろうって考えていながら俺は、どうぞつと試してみた。

失礼するつと言いながら入ってきたのは、やはり長門だった。

それから数人また執務室に入って来た昨日と比べて1人少ないと5人だった。

俺は長門以外に入って来た5人の新しい人達に自己紹介をした。

「はじめまして俺の名前は坂上瑞穂だ。みんなよろしく頼む」

「今度は、みんなの名前を俺に教えてくれないか？」

俺は昨日に続いて新しい人が来てくれて嬉しかった。

なぜなら新しい人が来るとその人と会う時に向こうは俺と話をしてくるからな。

いい人なら嬉しいが……

（私達は提督に自己紹介をしてくれないかと言われたので言ってみました。何事も最初が大事ですからね）

「私の名前は間宮です」

「私の名前は伊良湖です」

「私は新鋭軽巡洋艦、大淀です」

「私は航空母艦、鳳翔と申します」

「私の名前は明石です」

(俺は5人の自己紹介を聞いた後は近くにいた長門に呼んで言った)

長門、今からこの5人の人達を案内してほしい。

そして部屋の案内も頼む、それとカギも長門に渡しとくからな。

それらが終わったら俺が呼ぶまでは休憩してていいぞ。

(まあ休む事も大事だからな、そうさせてもらおうとしよう)

「わかった。それじゃあ私は今から、この5人を一緒に案内をしてくる」

失礼する。

そう言いながら私は執務室を出ていった。

そして後ろにいた5人も付いてきてくれた。

(長門に案内を頼んだ為に今この執務室には俺1人だけになった)

いつもだったら長門が隣に、もしくは高雄が俺の近くにいるから不思議な感じだな。

さてと今の時間はヒト、サン、マルマルか。

さつきまでヒト、フタマルマルだったのに、いつのまにか結構な時間が過ぎていた。

時間が過ぎるのが速いな。

さてと夕飯を作れるのは今の所は俺一人だけだから今から準備をしないと人数も増えたから役割分担しないとな。

人数が増えると必然的に食べる量と作る量が多くなってくるからな。

今から4時間後に夕飯だからそれまでに間に合うようにしないと

つとその前に……俺は執務室に付いている放送のスイッチを入れて

「全員に告げる。今日のヒト、キュウ、マルマルに歓迎会を行うからそれまでに食堂に集まるように」

「繰り返します」

今日のヒト、キュウ、マルマルに歓迎会を行うからそれまでに食堂に集まるように。

さて今から食堂に行くでしょう

(私は今、後ろにいる5人に鎮守府の案内をしていて今から部屋の案内をしようと思つて歩こうとしたら全体放送が流れてきた)

(歓迎会……なるほど。まだそういった事をした事も無かったな。今では3人しかいなかったからか、そして昨日と今日で人数が増えたから、そうしたんだろうなつと)

(私は考えながら再び歩き始めた)

(私は提督の全体放送を聞いた後に執務室に向かいました)

その理由は今回また新しい艦娘が来た事によつて提督の負担を少しでも減らそうと

思いました

私は提督が、いる執務室についたのでノックをした後にどうぞつと言われたので執務室に入りました

(俺は今から食堂に行つて料理を作る準備をしようと思つて執務室から出ようとしたらノックが聞こえてきた)

誰だろうつと思つて執務室に入れてみたら高雄だったので何だろうつと思ひながらも高雄の言葉を待つていた。

「提督さきほどの全体放送を聞きました。何か手伝える事ありませんか？」

俺は高雄が手伝える事はありませんか？と言われたので考えてみると食器を出したり洗ったり拭いたり使った物を片付けたり何かしらの作業は残るのを思い出したので言った。

「あるよ。食器を洗ったり片付けたり出したり何かしらの作業あるんだ。俺と一緒に食堂まで付いてきてくれないか？」

「わかりました。それでは一緒に食堂まで行きましょうか」

それから数時間後……

準備と料理が終わって高雄と一緒に料理を並び終わると全員が来て好きな席に座つたので俺は話を始めた。

「みんな聞いてくれ、今日は昨日と今日で人数が増えたので放送でも言ったが歓迎会を試してみた」

こう言った事はこの鎮守府では1回もした事が無かったからだ。

さて目の前に沢山の料理あるから食べてくれ。

そして俺に聞きたい事ある人は手を上げてから質問するように

それじゃあ歓迎会を始めろぞ。

提督↓乾杯

全員↓乾杯

第7話

私は歓迎会に出された沢山の料理を少しずつ一つ一つ食べていました。

料理は、とても美味しかったです。コレを作ったのは誰なんでしょうか？

私は長門さんの所に行き私は話をしてみました。

「長門さん、この料理を作ったのは誰でしょうか？」

私は料理を作ったのは誰なのかを聞いてみたくなった。

「この歓迎会で食べてる料理か？コレは全部、提督が一人で作ったものだ」

(私は、その言葉を聞いて驚きました)

私達、艦娘は提督を抜いて13人もいて提督が1人で、この人数分の食事を作るってなると、かなり前から準備をしなければなりません。

それに艦ごとに違います食べる量も違ってきます。それらを考えて作ったっていう事は……

私は長門さんにお礼を言った後に提督が、いる所に移動しました

(俺は、みんなが楽しそうに話をしてながら歓迎会の食事を食べてる姿を見て歓迎会をやって良かったと思ってた)

そして俺も、みんなに遅れながらも自分で作った食事を食べようとした時に後ろから誰かに声を、かけられたので俺は振り返ってみました。

「私の名前は鳳翔と申します。今日の歓迎会の料理について聞きたいのですが……」

（俺は鳳翔と言われた人に今日の歓迎会の料理について聞かれたのでまさか口に合わなかったのか？と不安になっていた）

「お前が鳳翔か？いや正確に言えば特務艦の龍飛だったな」

それで歓迎会の料理について聞きたいって言って言ったが、もしかして俺が作った料理が

不味かったか？それとも何か不満な所が、あつたのか？

「いいえ。料理はとても美味しかったですよ」

「そうか、実は口に合わなかったのかなと思ってたんでな」

「長門さんに聞きましたが今日の歓迎会の料理は提督が一人で作つたと聞きました
が……」

「ああ、確かに今日の歓迎会の料理は全部、俺が作つた料理だが？」

「実は提督に、まだ話してませんでしたの間宮さん と伊良湖さんと私は料理が出来る

んです」

提督は執務室で仕事してる以外に料理を作るって長門さんが言っていました、それだと提督にかなりの負担になります。

そこでこれからは私達に料理を任せては貰えないでしょうか？

そして出来れば小さな、お店でも構わないので、お店を出してみたいのです。

「……俺は次に来る新しい人が料理が出来る人ならいいなっと思ってた時が、ある」

けど俺は、お前達3人が料理を出来る事を知らなかったし食べた事も無いから

な……それじゃあ今日は無理だが明日の朝、昼、夜の3食をお前達3人が俺に作ってくれないか？

それで、もし俺が旨かったと思つたら許可してやるよ。

「明日の朝、昼、夜、ですか？」

「そうだ。俺は何を作れとは言わないが何の料理を作るか、もしくはデザートを作るかは好きにしろ。自分で考えてこの料理だったら自信あるな、でも構わない。」

「そうですか……確認しますが何を作っても構わないんですよね？料理でもデザートでもっ？」

「ああ、好きに作ってくれ。材料は食堂の冷蔵庫にあるから好きに使いな」

「そうですか、わかりました。それでは2人にも伝えてきます。それでは失礼します。」

（俺は龍飛さんが離れて行ったのも確認してから自分で作った食事を食べた）

料理を食べ終わってそれからしばらくするとまた誰かが俺に近づいてきて手を上げて質問をしてきた。

「私の名前は特型駆逐艦の1番艦、吹雪です」

司令官に聞きたいのですが提督は秘書官が、いないのですか？

「吹雪だな、わかった。お前の質問に答えてやるよ」

秘書官は、いないじゃなくて決めてなかったんだよ。俺を抜いて長門と高雄の2人だけしか、いなかったからな

「次に聞きたいのですが秘書官は専属ですか？それとも交代制ですか？」

「その質問にも答えてやるよ。」

そうだな．．．．．秘書官は専属になるな。

交代制にすると次の秘書官に変わる時に伝え忘れとかあるかも知れないからな

「最後に一つありますが私達が司令官にコレをやりたい、コレをしてみたいって言った場合どうなるんでしょうか？」

余程の事が無い限りは、出来る範囲で、やらせてやるよ。

ただし緊急事態が発生した時は中止になるがな

「わかりました。色々教えてくださいありがとうございます。それでは失礼します」

第8話

（朝になったので俺は布団から出て着替えていた。そして身だしなみを整えてから部屋を出た）

隣のドアを開けると執務室に繋がるので俺は執務室に入った。

そして俺は執務室の机の椅子に座って昨日の事を考えていた・・・

「みんな、そのままでもいいから聞いてほしい。今日の歓迎会どうだったかな？楽しめただろうか？」

俺は今回この歓迎会で、みんなが楽しく話をしたり食事をしたり出来て俺は良かったと思っている。

歓迎会はコレで終わりにするが艦娘全員は明後日のヒトサン、マルマルに執務室に集合するように。

最後に一言だけ言うぞ。コレからもよろしくお願いします

コレからも楽しく平和に過ごせればいいなと俺は思いながらも執務室で仕事を開始した。

しばらくすると執務室のドアからノックの音が聞こえてきた。俺は、どうぞつと言った後に入ってきた人を見ていた。

そしたら龍飛さんが入ってきた。きっと昨日の事だなと思っていた。

「提督、昨日の歓迎会で言っていた食堂の材料で作ってみた料理です。」

(俺は龍飛さんから朝ゴハンを貰って食べてみた)。

「焼き魚定食か、うまそうだな、いただきます・・・おっ美味しいな、」

「本当ですか？それは良かったです。」

「うんコレだったら別に、いいよ。龍飛さん、お店を出すのに許可を出してやるよ」

「ありがとうございます」

「ごちそうさま、うまかったよ、また何か作ってくれ」

「わかりました。」

「店については、どのぐらいの大きさがいいんだ？」

「そうですね・・・昨日みたいに歓迎会とかが出来るぐらいの広さは、欲しいですね」

「なるほど、わかった、次に開店時間だが決めているのか？」

「そうですね。私は昼の12時から8時までにしようかと思えます」

「そのぐらいならいいだろう。あまり遅くまでやると、いつまでも残ってそうで、お店側にも迷惑だからな。よし、龍飛さんの店が出来たら連絡してやるから待つてくれ」

「ありがとうございます。提督」

「ちなみに昼は誰が来るんだ？」

「昼は間宮さんが来るみたいですよ？」

「間宮か、わかった。龍飛さん。朝ゴハンありがとうございます」

「いえいえ、それではコレは下げますね。それでは失礼いたします」（龍飛さんが執務室

を出て行った後に俺は仕事を再開していた)

執務室で仕事をしていても、まだまだ量は沢山ある。

しかし少しずつ減って来ているからこのペースで、やると夜までには終わるな。

そう考えながら仕事をしていたらノックが聞こえてきた。失礼しますつとやって入ってきたのは間宮だった。

「提督、お昼前ですが私は料理では無くデザートを作りましたので食べてみてください」

「コレは………なんだ？」

「コレはパイナップルを使ったスイート・ポードです」

パイナップルを8等分にした後に左右に、少しずらしながらアイスクリームを前と後ろに2つ乗せて前と後ろのアイスクリームの間に生クリームを使つて最後にブルーベリーソースを使つて仕上げました

「そうなんだ？それじゃあ、いただきます。……以外と甘酸っぱいけど、うん。コレもいいな、間宮もお店を出す事を許可してやるよ。」

「提督ありがとうございます」

「龍飛さんにも聞いたが、お店の広さは、どれくらいがいい？」

「広さについては、こだわってないですね」

「龍飛さんのお店は12時から8時までと言ってきたが間宮は、どうする？」

「私も同じ時間でいいですよ」

「わかった。ならお店が出来たら連絡するから待っていてくれ」

「わかりました。それではコレは下げて戻りますね。失礼します」

(間宮のデザートを食べて元気になった俺は仕事を再開した。今なら夕飯までに間に合
いそうな気がしてきた)

それから数時間後

何とか夕飯までに終わらせた。

少しだけ休憩しようと思いい自分でお茶を入れて飲んでいるとノックの音が聞こえる。

俺は、どうぞつと言いながら、その人を待っていた。入ってきたのは伊良湖だった

「提督、私はコレを作ってみました」

「コレは……鍋か」

「そうです。コレは野菜を多目に使った寄せ鍋です。寒い時はコレで暖かくなりましよう」

「それもそうだな。いただきます。熱いが、できたてで美味しいな」

「そうですか？それなら良かったです。」

「お前も、お店を出すのか？」

「いいえ、私は食堂で食事を作りたいので許可が欲しいですね」

「いいだろう、お前の料理も美味かったからな、許可してやるよ。どうしても無理だと

思ったら龍飛さんと間宮の2人を呼んで3人で一緒に作れ」

「わかりました。それではそれでは失礼いたします」

やっと時間が終わった。

さて、あしたの準備をしながら寝ようとしないな

第9話

(私達、艦娘全員は執務室に向かっていた。それは一昨日の夜に提督が言っていたからか周りの人達は気になっていた。)

「何の話をするんでしょうね？」

(確かに気になりますね)

「提督の事だから何か重大な事を話すとか？」

(それも、ありそうですね)

「全員、話をするのはそこまでだ。執務室に着いたぞ」

(俺は一昨日の夜に艦娘全員に話をしなければならない事を今から話すつもりでいる。)

俺は全員が来るのを待っていた。

するとノックが聞こえてきたので俺は返事をした。

「失礼する。戦艦長門そして全ての艦娘を集めてきた」

「ありがとう長門、全員を執務室に入れてくれ」

「わかった。全員、執務室に入れ」

(俺は長門以外の人達が全員、入って来たのを確認した後話しかけた)

「俺は一昨日の夜に執務室に集まるように言ったが実は今日、みんなに伝えたい事があるから聞いてくれ。まず一つ目それは」

俺の専属秘書官を決めたって事だ。

(俺が秘書官を決めた事を言うと周りの人達が騒ぎだした)

「静かにしてください。提督の話は終わってませんよ」

(高雄が話と全員が静かになった)

提督、続きをお願いします。

「ああ、何故、秘書官を決めたかと言うと全員知っているが最初は長門と高雄の2人だけしか、いなかったが今は新しく来てくれた人達を入れて13人いる

やっと人数も増えてきたし人数が増えた事で出来なかった事も出来るようになったからな。

でも執務室で仕事をしている時どうしても俺1人ではキツイから専属秘書官を決めたんだ」

「司令官、秘書官は誰なんですか？」

「慌てるな、それを今から発表するんだから。俺が決めた秘書官は……長門お前だ」

「私が秘書官なのか」

「なんだ不満か？」

「私は、てつきり高雄を選ぶかと思っていたのだがな」

「正直、俺も高雄にしようかと考えていたが迷って考えてた結果、俺は長門を秘書官にと決めたんだ。」

「どうだろう？俺の秘書官になってくれるか？」

「わかった。それでは戦艦長門、今日から秘書官として提督を支えよう」

さて次に話すのは明日全員には訓練をしてもらおう事にした。

(訓練、ついにきましたか)

「とは言っても今から戦いに行かせる訳じゃないから安心してくれ。明日のヒトフタ、マルマルに全員グラウンドに集合してくれ。そこで訓練の内容を話す」

「わかりました。では確認しますが明日のヒトフタマルマルに全員グラウンドに集合すればいいのですね?」

「そうだ。だがコレは強制では無い、体調が悪い人は休んで貰っても構わないから来た人だけ来るように」

それでは話は終わりだ。

それと長門は執務室に残ってくれ。長門以外は解散しろ。

「わかりました。それでは失礼します。」

第10話

(俺は長門以外の全員が執務室から出ていくのを確認した後に俺は長門に声をかけた)

「長門は今日から秘書官として俺をサポートしてほしい」

ただ……今日は秘書官としての仕事は無しだ。明日から秘書官として頼む。

今日は連絡だけだ。後は俺が着任した際に決めたルールに従ってくれ

秘書官の仕事は朝の8時から夕方5時までだ。

他に聞きたい事あるか？

「秘書官の仕事は明日からって言うのは、わかった。だが休みの日は、あるのか？」

「もちろん。1週間ある内の毎週2日間は休みだ。働きっぱなしは疲れるからな、休む事も大切だ。」

後は聞きたい事あるか？

「いいや、もう無いな」

そうか、それじゃあ明日から秘書官として頼む。

さてと話も終わったから今から訓練の準備をしないとつとその前に……全員に告げる。ヒトサン、マルマルにグラウンドに集合する事。

繰り返します。ヒトサン、マルマルにグラウンドに集合する事。

さて長門、一緒にグラウンドに行くぞ。付いてきてくれ

「わかった。付いていこう」

それから10分後

さて全員そろったな。今から訓練を開始するぞ。

「何の訓練をするっぽい？」

「いい事を聞いたな、それはな……避ける訓練だ」

「避ける訓練ですか？」

「そうだ。艦娘は当たれば小破、中破、大破、最悪の場合は沈んでしまうかも知れないからな。」

なら沈まない為には、どうすればいい？

避けるんだよ。どんなに強い攻撃も当たらなければ意味は無い

そして相手の攻撃に当たらなければ自分は無傷で帰ってこられるし、誰も悲しまないで、すむからな

そんな訳で、お前達は全員に避ける訓練をしてもらう。

俺が、この水鉄砲で撃つから、とにかく避ける

今から1時間やるぞ。最後まで生き残った人は俺が後で料理を作ってやるよ

撃沈した人はグラウンド3周走ってこい

「1回当たれば小破、2回当たれば中破、3回当たれば大破、4回当たれば沈んだ扱いですから、そのつもりでな。5分やるから今の内に隠れてな、5分たったら探しに行くかな、それでは訓練を開始する」

そして5分後・・・

あそこにいるのは……高雄か、気づかれていないから今がチャンス

当たれよな。4回攻撃だ

えっ冷たい。いったいどこから……

するとドコからかビービービーと音が聞こえてきた。

高雄選手が提督の攻撃4回とも当たったので撃沈扱いとなります。

直ちにグラウンドのベンチに移動してください

それが全ての艦娘に伝わった瞬間だった。「さて次は誰を狙うかな？」

俺は次に打つ相手を探しに動き出した

第11話

（俺は高雄を退場させた後に周りに注意しながら近付いていた。そうすると向こうから誰かが近付いてきた）

「足音……誰かが、コッチに来ている」

そう思った俺は急いで建物の影に隠れた。

そして誰が近付いてきたのかを確認しようとした瞬間だった

「みなさん司令官を見つけました」

吹雪の言葉によって周りにいる人達は一斉に逃げ出した。

しかし俺は誰を撃てばいいのか一瞬だけ迷ってしまう。

以外と人数が多かったからだ。

俺は正面に、いる電を撃つ事にした。

電は2回だけ当たった後に逃げようとしたのか背中を俺に向けた。

俺は躊躇わずに電を撃った。その後に電は残り2回の攻撃に当たり退場になった。

ビービービー

電選手が退場しました。電選手は急いでグラウンドのベンチに移動してください。

この事は他の人達にも伝えられた。

「高雄さんに続いて電ちゃんが、やられた」

「だが少しでも生き残る為にはチームを組んだ方がいいだろう。」

「1人だけなら狙われますからね」

「だがチームを組んで動けば先程みたいに誰を撃つか迷うようになる」

「コレは使えますね。」

「みなさん生き残りましょう」

（俺は驚いていた。まさかチームを組んでいるとは思わなかったからだ。確かに組めば生き残る確率は上がるし何かあってもすぐに伝えられるしな）

「だが、まだまだ落とさせてもらおうぞ」

俺は、また移動しようとしたら夕立を発見したので近付いたら向こうも気付いた。

「あつ提督だ。逃げるっぼい」

「逃がす訳が無いだろうが、落ちろ」

（しかし予想外な事に夕立は俺の攻撃を3回とも避けた）

「何、当たらなかつただと。だが、まだだ」「コレで、どうだ」

「ぼいぼい．．．．．」

ビービービー

夕立選手が撃沈しましたので退場してください。

「コレで3人を倒したが残り20分．．．．．やれるか？」

「今度は夕立ちちゃんが」

「いつ提督が来るか、わからないから全員、周りに注意するように」

「吹雪ちゃん、残り時間は？」

「あと20分です。それまでに逃げ切れれば……」

「逃げ切れれると思ってるのか？」

「しっ司令官」

「なんですって吹雪ちゃん、今すぐ避け……」

「遅いな」

「……私は、まだ」

ビービービー

吹雪選手、撃沈扱いになったので退場してください

「さて次は・・・龍飛さんか」

「もうこんな所まで来ていたんですね」

「俺は全員倒す気でいるからな、だが時間が限られているんでな。終わらせる」

「させませんよ。それに行かせません」

「当たれー」

「当たる訳には、いきませんね」

「さすが小さいながらも太平洋戦争を生き抜いた大ベテランですね」

「けどそれは艦の話で、あつて今じゃない。」

「確かに私は、あの時代を生き抜いてきましたが艦娘として今を生きていて今のこの勝負には負けたくないんです」

「……長門と高雄の2人が最初からいなければ龍飛さんを秘書官にしたかったよ」
「そうですか。それは嬉しいですね」

けど、この勝負に勝つのは……

「俺だ」

「私です」

ビービービー

タイムアウトです。速やかに参加者は全員グラウンドに集合してください。

「今回は俺の負けだな、龍飛さん」

「そうですね。提督」

「今度は訓練じゃなくて料理勝負しませんか？」

「もちろんいいですよ。その時も勝つのは私ですが」

「じゃあ楽しみにしてくださいね。」

「はい、それでは……」

それから、しばらくして……

「さて今回の訓練の意味は戦いに行く時に敵は、どこから攻撃をするか、わからない

い……どんな場所から、どんな距離からどんな状況でも絶対に当たらないようにする為に……全員が無傷で帰って来れるように考えたものだ。生きて帰ってくれば、いずれは自分の姉妹艦に会えるだろうからな。」

「さてと撃沈扱いの人は着替えたならグラウンド3周走ってくる事

生き残り組は俺が作った料理もしくはデザートを出してやるから楽しみにしておきな。それじゃあ今日の訓練はコレで終わりだ。全員解散しろ」

「ああ言い忘れたが明日は1人1人の避ける練習をするからな」

体調に気を付けてまた明日も頑張ろう

第12話

「それじゃあ今日は昨日と違って個人戦をやるぞ」

まずは秘書官の長門からな

戦艦だからか動きは鈍いが、その分を避ける練習すれば必要最低限の動きで敵の攻撃に当たらないようになるからな

昨日と同じで1時間やるからな。

「わかった。それでは、やるとしよう」

「高雄、開始の合図を頼む」

「わかりました。それじゃあ5秒前からいきます。5・4・3・2・1・始め」

「いけー」

「危なかったな」

「だったら長門コイツは．．．．．どうだ」

「何、うわああ」

「まず1回目だ」

しまった。提督が撃つたのが当たってしまったか

「続けていくぞ。はあああ」

(しかし、この戦艦長門、簡単に当たる訳には．．．．．)

「避けられるようになってきたな。そのつもりで避け続ける」

「ああ、だが油断は、しない」

（私は当たらないように注意しながら避け続けた。それから20分後）

ビービービー

個人戦が終了しました。訓練をそこまでにしてください。

「最初は、ともかく途中から当たらなくなってきたぞ。長門、コレからは当たらないように注意しながら戦えるように頑張れよ」

「そうだな、確かに注意しなければならないな」

「けど良く頑張ったな、長門は今から休憩しておくように」

「わかった。それでは休ませてもらうとしよう」

「次は・・・・高橋お前だ。前に出てこい」

「はい、わかりました」

「さっきの長門を見てたからわかったかも知れないが、とにかく当たらないように注意するようにな」

「長門、開始の合図を頼む」

「わかった。それでは5秒前からいくぞ。5・4・3・2・1・始め」

「まずは正面から撃つ」

「当たりませんよ」

「なら高雄……コレは、どうだ。」

「危ない、何とか避けられましたね」

「へえ……長門の後とは、いえ中々やるな」

「さつきの提督と長門の、やり取りを見ていて自分だったら、どうするか考えてました」

「さすが高雄だな。この鎮守府では2番目の艦娘だけは、ある」

「しかしレイテ沖海戦みたいに妹達3人を失わないように生き残る為にも悲しまない為にも避ける練習をすろぞ」

「はい、そうですね」

「では再開するぞ。当たれー」

「今のは危なかったですね。けどまだまだ、やれます」

「なら続けていくぞ。いつけー」

「当たり前そうで怖いですね。けど当たらないように注意しなくては、なりませんね」

「コレも避けるとはスゴいな、だがまだだ。」

「くっそろそろ危ないかもしれませんね」

「俺としては退場させたい所だが……長門の個人戦を良く見ていたからか、ちゃんと避けられてるな」

「しかし俺は一回だけでも高雄に当てなければならぬ」

「なら私は当たらないように提督の動きを見えますよ」

「残り時間は10秒ですか。この勝負は私の勝……」

「ちには、ならねえよつと」

「きやあ、当たってしまいましたか」

ビービービー

個人戦が終了しました。訓練をそこまでにしてください。

「惜しかったな。最後のアレ、油断しなければ俺の負けだったんだがな」

「私とした事が……勝ちに目が眩んでいました」

「まあ勝ちたいって気持ちは理解できる。負けたくないしな、しかし油断は禁物だぞ」

「はい、今後は気をつけます」

「ああ、それでいいさ。高雄は今から休憩して休んでいろ」

「はい、わかりました」

「さてと次は……」

それから1時間後

「よし今日の訓練は終わりだ。秘書官以外は夕飯までは自由行動だ。後の人は全員解散しろ。長門は俺と一緒に執務室に来るように」

「わかった。付いていこう」

第13話

「私は提督に聞きたい事あるんだが、いいだろうか」

「うんいいよ」

「さっきの訓練だが当たらないようになって言ってたが本当に当たらなくなるのか？」

「なるよ。油断したり慢心したり傲慢にならなければね」

「それに……誰だつて生きていたんだよ。死にたくないんだよ。」

「……」

俺は長門と今、話をしている不安になっていたので前から長門を抱き締めた。

「てっ提督なにを」

「俺はな、不安なんだよ。戦ってる最中に誰かが沈むんじゃないのかって思う時あるんだよ」

「そっそれは・・・」

「俺は沈ませたくないから俺は避ける訓練をさせてるんだよ。」

「特に長門とは俺の秘書官でも、あり1番好きな人だからな」

「わた・・・私は」

「俺は長門が好きなんだ。だから特に沈ませたくない。生きてほしいんだ」

「だから言うよ。俺は長門が好きだ。愛してる」

「私も提督が好きだ。離れたくない」

「なら……夕飯まで一緒にいてほしいな」

「わかった。提督と一緒にしよう」

（そして俺は長門とキスをした）

（私は提督に聞きたい事あったので執務室に向かっていた）

（提督は訓練の時に私に油断をしなければっと言ってましたが）

　　っと考えていると執務室に着いたので提督が普段いる執務室に入ろうとノックをしようとした瞬間に声が聞こえていた。

「だから言うよ。俺は長門が好きだ。愛してる」

「私も提督が好きだ。離れたくない」

私はそれを聞いた瞬間に私は執務室から離れていった。

(私は、どうやって自分の部屋に戻ったか覚えていませんでした。私は衝撃でした)

「でも提督と長門が．．．あの2人なら、お似合いですね」

「でも私は諦めたくない、どうすれば．．．」

「夕食の準備が出来ました。全員、食堂に来てください。繰り返します」

「夕食の準備が出来ました。全員、食堂に来てください」

(もう、そんな時間だったんですね。行かないと行けませんね)

「今日と昨日の訓練はキツかったわね」

「けど司令官が言っていた意味が少しわかった気がしましたよ」

「確かに当たらなければ意味ないしね」

「鈴谷は、この訓練いいと思うよ。それってやり方に、よっては避けながら攻撃が出来るって事だし」

「それもそうね」

「何よりも提督は私達を大切にしているから、そう考えているんだと思いますよ」

「そうですよね。」

「おつ全員いるな、うんうん。やっぱゴハンは1人よりも、みんなで一緒に食べる方がいいな。長門は何にする?」

「私はA定食で頼む」

「わかった。スイマセン、A定食を2つお願いします」

「わかりました。しばらくお待ちください」

「提督に聞きたいんだが私達をどう思ってるんだ？」

「どういう意味だ？」

「私達は見た目は人間だが艦娘だ。中には私達を兵器や道具と言うような人達もいる」

（長門が、それを言った途端に周りから音が消えて食堂全体が静かになった）

「・・・・・・・・」

「提督が私達を大切にしているのは、ここに所属している者ならば知っているだろう。しかし提督は自分の事を疎かにしていないか？」

「・・・・・・・・」

「私達は大切にされて嬉しいが提督に何かあった時私達は、どうすればいい?」

「その時は……秘書官の長門が俺の代わりに提督としての全権を使って構わないし好きに過ごしていくといい」

「わかった。それでは、そうしよう」

「提督、長門さん。お待たせしました。」

「ありがとうございます。いただきます」

「いただきます」

「うん、やっぱりおいしいな」

「そうだな」

「それは良かったです」

「それと提督、明日の朝に聞いてほしい事あるのですが」

「??わかった、いいぞ」

「それでは明日の朝、執務室に行きますので」

「ああ、わかった。それと・・・ごちそうさまでした。」

第14話

私は昨日の夕飯の時に言ったように執務室に来ていました。ノックをして中からどうぞつと言われたのを確認してから中に入っていった。

「提督、昨日の夕飯の時にも言いましたが提督に聞いてほしい事が、あります」

「なんだ？言ってみろ？」

「今は、そんなに人数も多くないので、まだいいですがコレからは人数が増えてくると食材が、どんどん減っていきます。」

「まあ確かにな」

「艦によつて違いますが食事の時に食べる量が多くて他の食事を作つてる最中に食べ終わつて別の料理もしくはデザートとかを追加されたりすると、作りきれなかつたりして私達、作る側の人達が追い付けなくなつたりします」

「そうだな」

「そうならない為にも私達3人以外に誰か他に雇つてもいいでしょうか？それと今よりも今後かなり多目に食材を用意してほしいのですが」

「……2つ目に関しては確かに重要な事だな。よしいだろう、許可してやるよ」

「ありがとうございます」

「ただ1つ目は良くわからんな。人数だけなら5〜6人ぐらい雇つてもいいんだが」

「提督ただ雇うだけではダメです。料理が出来る人で無ければなりません」

「料理が出来る人だけだと？」

「そうです。包丁も使った事ないような素人だった場合に料理を教える前に包丁を使つて切り方を勉強させないと、まずやっていけません。その後に料理を教えるつてなると

時間が、かかりすぎます」

「まあ確かに、そうだな」

「その為にも私達みたいに料理が出来る人達がいたら教えてください、」

「なるほどな、先の事を考えるとそうだよな、わかった。料理が出来る人だけだな、俺の方で確認しておく」

「ありがとうございます」

「誰を雇うかって事に関しては3人に任せる。その方が色々と、やりやすいだろうからな」

「何から何までスイマセン」

「気にすんなって生きていく中で食に関しては特に気にしないと、いけないし食べるのは楽しみでもあるからな」

「3人の料理の腕に関しては俺も理解しているからな、そこまで考えてなくて逆に、すま

なかつたな」

「いえいえ、提督が私の話をちゃんと聞いてくれて嬉しかったです。」

「もう他に言う事は無いか？」

「……今は無いですね」

「そっか、朝から悪いな、執務室に来てもらって」

「私達にとって重要な事ですから」

「違うない」

「それじゃあ私はコレで失礼します」

「また何か、あつたら俺に言いに来い」

「わかりました。それでは失礼します」（提督に今後の事を考えて話が出来て良かったです）

「さて今から朝食の準備をしないといけませんね」

「今日も頑張らないと」

第15話

「高雄また建造してくれないか？」

「今度は何人ぐらいですか？」

「最低あと5人ほしいな」

「わかりました。それでは失礼します」

「提督また人数を増やすのか？」

「そうだ。後5人ぐらい来たら戦わせている間に遠征にも行かせたり誰かが敵の攻撃に当たったら、その人と交代で出せたり鎮守府の警備や俺の護衛も出来るようになるからな」

「なるほど、そこまで考えていたのか」

「そんな訳で俺は人数をまた増やす事にしたんだよ」

「そういった事なら仕方ないな」

「だろう？さて長門には俺の秘書官として俺の隣で一緒に仕事な」

「結構な量だな」

「まあそうだな、頑張ろう長門」

「ああ、頑張ろう」

（私は提督に建造を頼まれたので行きました）

（今回は誰が来てくれるのでしょうか？気になりますね）

(俺は全体放送を使ってある人達を呼ぶ事にした)

「龍飛さんは執務室に来るように、」

「繰り返しします」

「龍飛さんは執務室に来るように」

提督からの放送が聞こえた私は間宮さんに任せて執務室に行った。

そしてノックをしてから、どうぞと返事が来たので私は執務室に入っていきました。

「提督、放送を使って呼んだみたいですが何ででしょうか？」

「龍飛さんが言っていたが食材についてだがコレは何とかなった。明日の朝だけど業者が来るから明日から、かなりの量の食材が届くから出迎えてくれ」

「わかりました。明日の朝ですね」

「次に料理が出来る人についてだが残念だが聞いてみたが、いなかったそうだな」

「そうでしたか少し残念ですね」

「あと高雄に頼んだんだが、もしかしたら、また人数が増えるかも知れないから今日の夜に歓迎会の準備をしてくれ」

「食材は、まだあるから今日の分ぐらいは大丈夫だと思うが今日もし使いきっても明日の朝に届くから安心してくれ」

「わかりました」

「俺も手伝える時は手伝ってやるからさ」

「でも提督は仕事が、あるのでは？」

「確かに仕事は、あるには、あるが食事の時ぐらいは1人じゃなくて全員と食べたいんだよ」

「そうですね。食事の内容については何か？」

「特にないな。今ある食材で出来そうな料理を好きなだけ作っていいよ」

新しく来る人達は何人ぐらいですか？

「それは高雄次第だな、最低1人ぐらいは来てほしい所なんだがな」

「もしかしたら誰も来ないかも知れないと」

「無くは無い……が仮に誰も来なかったとしても食べ物だから、すぐに終わるよ。みんな良く食べるからさ」

「それもそうですね」

「それと……最後に1つ言う事が、あるんだが聞いてくれるか？」

「何でしょうか？」

「明日の昼に龍飛さんの店と間宮の店が出来ると連絡あったから伝えておくよ」

「本当ですか？ありがとうございます」

「詳しい話は、また後で話すとしよう」

「俺からの連絡は以上だ。間宮にも伝えておいてくれ」

「わかりました。そうします。それでは失礼いたします」

第16話

高雄Side

(私は提督に頼まれたので建造をしました)

それからしばらくすると新しい艦娘が来ました。

その人達は……

英国で産まれた帰国子女の金剛デース！

ヨロシクオネガイシマース

翔鶴型航空母艦1番艦、翔鶴です。

水上機母艦千歳です。私

長良型軽巡の2番艦の五十鈴です

阿賀野型軽巡洋艦、その長女、一番艦の阿賀野よ

（まさか5人も来るとは思わなかったので私は驚きましたが、まずは、あいさつをしないといけませんね）

初めまして私は高雄です。

提督が執務室にいるので案内をします。

私達は執務室に向かって歩いていました。

後ろにいる人達は私に付いて来てくれました

（来ても2人か3人ぐらいだと思ったんですけどね）

などと考えていたら執務室に着いたのでノックをして中から、どうぞつと言われたのを確認してから失礼しますと言いながら中へ入りました

提督 Side

俺は執務室で仕事をしていると高雄が執務室に入ってきたので中断して高雄を見ていた。

その後に5人の人達が執務室に入ってきたので、俺は少し驚いていた。

「英国で産まれた帰国子女の金剛デース！」

「ヨロシクオネガイシマース」

「翔鶴型航空母艦1番艦、翔鶴です」

「水上機母艦千歳です」

「長良型軽巡の2番艦、五十鈴です」

「阿賀野型軽巡洋艦、その長女、一番艦の阿賀野よ」

「みんなの自己紹介ありがとう。それじゃ俺も自己紹介をしないとイケないな、俺の名前は坂上瑞穂だ。よろしくな。今は仕事が残っているから話は出来ないが今日の夜に歓迎会をするから、その時になって聞きたい事あったら聞いてきてくれ」

(その後には俺は高雄に向かって話しかける)

「高雄、今いる5人の人達と一緒に部屋のご案内を頼む。コレが部屋のカギだから渡しておく。それが終わったら夕飯までは自由行動だ」

高雄 Side

「わかりました。それでは失礼します」

私は5人の艦娘達と一緒に執務室を出ていきました。

長門Side

「人数を増やすと資材が減るが資材は大丈夫なのか？」

提督Side

「資材については大丈夫それと長門に頼みたい事あるんだけどいいかな？」

長門Side

「提督が私に頼むとは、めずらしいな、なんだ？」

提督Side

「今日の歓迎会が終わった時に今日、新しく来た人達以外のメンバー全員を集めてほしいんだ。」

長門Side

「それは別に構わないが、なぜ全員なんだ？」

提督Side

「実は明日の朝に業者が来る事になっていてね。その業者っていうのは食材のでな、かなり多めに頼んであるといえ、どのくらいの量かは、わからないから1人2人だと運びきるまでに時間が、かかるからな」

長門Side

「確かに聞いてみるとそうだな。明日の朝になったら手伝いに行けばいいんだな？」

提督Side

「来る時間は9時みたいだからよろしく頼む、本来ならば俺も行かなくちゃならないが仕事が残っているから執務室から離れられないんでな、つと言うわけで長門この頼みを

受けてくれないだろうか？」

長門Side

「わかった。そういう事なら引き受けよう」

提督Side

「さてと……まだまだ量が結構あるな」

長門Side

「コレは1日では終わらないのでは、ないか？」

提督Side

(今日中に終わらなかつたら深夜までしていればいいか)

「まずは出来る所までやろう。少しでも減らしておかないとな、よし頑張ろう」

高雄Side

「夕飯の準備が出来ました。全員食堂に来てください、繰り返します」

「夕飯の準備が出来ました。全員食堂に来てください」

長門Side

「もうそんな時間か、早いものだな」

提督Side

「確かなな、よし一緒に、いくぞ長門」

（俺と長門が一緒に歩いて食堂に向かっていると俺達以外の人達は全員食堂にいたので俺は全員の顔が見やすいように移動した。長門は俺の隣に移動していた）

「今日は歓迎会に集まってくれて、みんな本当に、ありがとう」

「俺は提督ではあるがベテランでは無くて新人だ」

「だからこそ間違ってしまったかと思うが俺は全員と仲良く1日1日を過ごしていきたいと思っている。」

「長いあいさつは嫌われる元だから、あまり言わないがコレからは、この鎮守府の一員として頑張ろう。」

提督↓乾杯

全員↓乾杯

第17話

提督Side

俺は、みんなと一緒に歓迎会の料理を食べていると後ろから誰かが話しかけてきたので俺は振り返ってみた。

金剛Side

「HEY、提督うー！私は提督に聞きたい事あるのですがいいですか？」

「なんだ？言ってみろ」

「この鎮守府には私の妹達は、いますか？」

提督Side

「悪いが金剛の妹達は、ここには、いないんだよ」

金剛Side

「そうでしたか・・・それは残念でしたね、けどいずれ会えるからいいデース。それじゃあ提督また後で来マース」

提督Side

俺は金剛と話をした後にお茶を飲んでからしばらく休んだら翔鶴と千歳と五十鈴と阿賀野に声をかけた。

「みんな楽しんでるか？今日は、みんなの歓迎会だから沢山の料理あるからみんなで食べてくれ。」

翔鶴Side

「このような歓迎会をしてくれてありがとうございます。さつき提督は金剛さんに妹達の事を聞かれましたが、ここには私の妹達は、いないのですか？」

提督Side

「すまないが、この鎮守府には姉妹艦は誰もいないんだ。けど生きてさえいれば、いずれは会えると思うからしばらくは我慢してくれると嬉しいんだがな」

翔鶴Side

「そうなんですか？ですが提督が優しそうな人で私は良かったと思いますよ」

提督Side

「基本的には余程の事が無い限りは……緊急事態が発生したとか、そういうのが無い内は俺の出来る範囲で好きな事をやらせていくつもりなんだな。」

翔鶴Side

「それは嬉しいですね。けど私達は今度は軍艦では無く艦娘として生きていく以上は提督と一緒に付いていきますのでよろしくお願いします」

提督Side

「ああこちらこそ、よろしくな」

俺は、そう言いながら翔鶴と握手をした。

俺は次に五十鈴に話しかけた

「執務室では話しが出来なくて悪かったな、お前は確か……五十鈴だったよな？」

五十鈴Side

「そうよ。私の名前は五十鈴で後の海軍を支える人物が多数輩出されたの。凄いでしょう？」

提督 S i d e

それって確か歴代艦長の中から、あの山本五十六提督、

山口多聞提督などの話しだったな

五十鈴 S i d e

「今回は艦娘として生きていく訳だからコレからよろしくね」

「ああこちらこそ」

提督 S i d e

お前は阿賀野だったよな？間違ってたらゴメンな」

阿賀野Side

「間違っていますよ、私は阿賀野型軽巡洋艦、その一番艦の阿賀野です。私の妹もいな
いんですよね？」

提督Side

「ああ……この場所にお前の妹は、いないな、けど俺達と一緒に頑張ろうな」

阿賀野Side

「ごちうさ、よろしくお願ひします」

提督Side

俺は最後に千歳と話をしようと思つていつたら向こうが先に気づいてくれて話しかけてきた。

千歳 S i d e

「今日は、ありがとうございます。どの料理も美味しいです」

提督 S i d e

「それは良かった。まだまだ人数が少ない為に色々とお前達には苦勞させてしまう事もあるかも知れないが、よろしくな」

千歳 S i d e

「(こちら)そよろしくお願いします」

提督 S i d e

俺は今回の新人組と話しをしてから時間を見るともう夜の10時だったのでお開きにしようと言員に話しかけた

「えーと楽しんでる所で悪いが、そろそろお開きにしようと思います」

「まだまだ話したいって人は自分達の部屋に戻ってから話すなり何なりしてください」

「俺からの話しは以上だ。それじゃあ今日この鎮守府に来た新人組は明日から、よろしくな、それと長門は明日の朝だけど執務室に来てくれ。それでは解散また明日な」

第18話

提督Side

俺は秘書艦の長門と一緒に執務室で仕事をしていた。

黙々と真面目に仕事をしていたからか目が疲れてきたが俺達は何とか仕事を終わらせる事が出来たので少しだけ休憩しようと考えていた。

「長門、悪いが俺に暖かいお茶を頼む」

「わかった。少し待っていてくれ」

長門が俺から離れると俺は机の中にある一枚の紙を見ていた。そこにはケツコン・カツコカリの話を書いてある紙で、指輪と一緒に、あるからだ。

そう……俺は今ケツコン・カツコカリで考えていた。

(俺の鎮守府で、もしケツコンするとしたら長門か高雄の2人の内どちらかだろうな)

俺は今その事について迷っていた。

長門Side

私は提督に、お茶を頼まれたので私は提督から離れていた。

そして暖かいお茶を提督の机に置くと提督は、ありがとうと言った後にお茶を飲んだ。

私は、その後に書類を確認しながら回りの整理をしていた。

そしたら提督の机に1枚だけ見慣れない紙が、あったので見ようとしたが今コレを見れば絶対に気づかれるので私は気付かなかったフリをした。

提督Side

俺は長門に頼んだ暖かいお茶を飲みながら休憩していると長門が回りの整理をしていた。その時に1枚だけ見慣れない紙が、あったからか長門の動きが止まった。長門の事だから、きつと見たいんだらうけど俺が執務室にいるから見れないんだらうなと思っていて。

俺は暖かいお茶を飲み終わったので執務室から全体放送を使った

「昨日の新人組は今から1時間後にグラウンドに集合してください」繰り返します

「昨日の新人組は今から1時間後にグラウンドに集合してください」

放送が終わったので俺は長門に話しかけた。

「長門、俺は今から新人組の訓練をやりに行くから何かあったら遠慮せず連絡してくれ」
「ああ、わかった」

俺は執務室から出て行って先にグラウンドに向かっていた。

俺はグラウンドに着いて20分後に新人5人組、全員が集まってきた。まだ時間あるの
にな

「さて俺は今からお前達に訓練をさせるが、その訓練というのは避ける訓練だ」

「HEY提督、なぜ避ける訓練をするのデスカ？」

「この訓練は、お前達を沈ませない為の訓練で生き残らせる為の訓練なんだよ

この鎮守府は誰も姉妹艦と言われる人物は、いないのでな

それに金剛……お前は妹が3人いるが、その妹達と会う前に、お前が沈んだら会えないだろう？

「確かにそうデスネ」

だから俺は考えたんだよ。避ける訓練をさせて当たらないようにすれば全員が生き残って無事に帰れるようになるしな

さてと、まずは金剛だ。いくぞ

それから1時間後

よし、今日はコレで全員終わりだ、お疲れさまでした。それでは解散しろ
「ありがとうございました」

第19話

長門Side

提督が新人組の訓練をする為に執務室から出ていった後に私は執務室で1人だけになった。

だが今の私には気になっている事が、ある。それは提督が、さっきまでいたから見れなかったが1枚だけ見慣れない紙が、あったからだ。

私は机の中を見てみると確かにあった。裏になっていて、わからなかったのだから私は表にして、ひっくり返す。そして私が見たその紙は……

「ケツコン・カツコカリについて」

私は驚きつつも言葉には出さなかった。しかし見慣れない物が後1つあった。それ

を見ていると指輪だった。コレは間違いない。

しかし提督が誰かに指輪を渡すとしても、この鎮守府では私と高雄の2人しか、いないが提督は私に指輪を渡すんだらうなっと思っている。そう思っていたらノツクの音が聞こえたので私は、どうぞと言いながら入ってくる人を待っていた。

高雄 Side

私は今の自分の気持ちに正直になろうと提督がいる執務室に向かっていた。そして執務室に着いたのでノックをした後にどうぞと言われたので失礼しますっと言いながら執務室の中に入っていきます。

執務室に入ると提督が、いないけど長門しか、いませんでした。

私は気になったので長門に話しかけました。

「あれ？長門、提督は今どこにいるの？」

「提督なら新人組の訓練をやり、執務室から出ていったぞ。場所はグラウンドだ」

「なら私は1度、部屋に戻るわね」

「高雄ちよつときてくれないか？」

「何かしら？」

私は長門に呼ばれたので近づいていくと長門が何かを持っていた。私はそれを確認しようとしていたら

「ケツコン・カツコカリについて」

私は頭を何かで叩かれたぐらいの衝撃が、ありました。しかもそれだけでは、ありませんでした。もう1つ見慣れない紙がありました。見てみると指輪でした。コレは間違いない。提督は長門とケツコンするんだなと私は思っていた。

「……良かつたじゃない長門、きつと提督は長門に渡すと思うわ」

「何を言ってるんだ。高雄も提督の事が好きなんだろう？見ててわかるぞ。」

「そうよ。私は提督が好きよ。だけど私は……」

「自分の気持ちに嘘は付くな、今の気持ちを提督に言ってみろ、他の人なら私も許さんが高雄は私の次に来た艦娘だろ。それに高雄は私と一緒に提督を支えながら人数が少なかった、この鎮守府で一緒に過ごしてきただろ。もし高雄が提督に告白しても私は受け入れるさ」

「長門……ありがとう」

「私は提督に告白する……例え受け入れて貰えなかったとしても今の自分の気持ちを伝える事にするわ」

第20話

提督Side

俺は一人で執務室にいた。いつもなら秘書艦の長門が近くにいるが今は避ける訓練をしている為に離れていた。

その時にノツクの音がしたので俺は返事をした。

失礼しますつと言って入ってきたのは高雄だった。俺は高雄が今から何かを言うだろうなつという感じがしたんで俺は待っていた。

高雄Side

私は執務室に入ると提督しか、いなかったなので話せる時は今しかないっと思っかけて話しかけた。

「私は提督に今から大切な話が、あるので聞いてくれませんか？」

「??? ああ、いいぞ言ってみな」

「私は提督の事が大好きです。だけど私は長門と一緒にケツコン・カツコカリの紙と指輪を見てしまいました」

「そうなんだ？まあ、いつかは言うつもりだったんだがな」

「私は提督に聞きたいのですが提督は誰に指輪を渡すのですか？」

「それなんだが、まだ決まってるんだよ」

「俺は平和になったらこの指輪を渡したいって思ってるんだ」

「今では無いのですか？」

「今、俺が誰かに指輪を渡してその人が沈んだら俺が悲しくなるからな。俺から見たら妻だからな。そう考えると今は渡せない」

「……………なるほど、そういう事でしたか」

「だけどコレは言っとく…………俺も高雄の事が好きだ。だけど俺は長門の事が好きなんだ。それでもいいのか？」

「構いませんよ。長門も私なら、いいと言ってくれました」

「そうなの？それは知らなかったな」

「私は提督が長門を選んだとしても私は提督の隣にいますから」

「そうか、ありがとう。俺は嬉しいよ。コレからも長門と高雄には色々迷惑をかけたりするかも知れないが、よろしく頼む」

「大丈夫ですよ。私たちが全力で提督を支えますから提督は安心しててください」

「その為にも1日も早く平和になってくれると嬉しいんだがな」

「そうですね。けど私達はここの鎮守府の所属で、ある限り誰も沈みませんよ。」

「だといいたがな……」さてと朝ご飯の準備をしないとな。

高雄、悪いが後少して長門の訓練が終わるから終わったら食堂にそのまま行くように言つといてくれるか？高雄も食堂で朝ご飯を食べたら長門と一緒に執務室に来てくれ。

長門と高雄以外は執務室には入れないように言つといてくれ。頼むぞ

あれ？提督は、どうするのですか？今日の俺は執務室で食べるから間宮にも朝ご飯いらぬと言つといてくれるか？

わかりました。それでは失礼します

高雄が執務室から出ていって高雄の姿が見えなくなった瞬間に俺は倒れそうになつた。

最近徹夜ばっかりしていたからか、ここにきて疲労が出てきたのかもしれない。

だが、みんなには迷惑を、かけたくないから俺は 大丈夫なフリをして朝ご飯を作つて食べた。何とか、バレずに、やりきらないとな

第21話

提督Side

俺は今日の朝から体調が悪かった。けど薬を飲めば大丈夫だろうって思って薬を飲んだ後は普段みたいに仕事をしていた。隣には秘書艦の長門が俺と一緒にいる。今日は特に多い気がする……体調の事を考えると深夜まで仕事やって大丈夫かな？

だがやらなければならない、なぜなら今やっておかないと次の日と昨日の日でプラスされてしまうからだ。出来るなら今日の内に片付けたいな

それから数時間後

俺は、やっと半分を終わらせた。今の時間は夜の6時だ。

「長門もう秘書艦の時間は終わりだから食堂に行ってきていいよ」

「そうしたい所だが、まだ半分もあるぞ？」

「大丈夫だよ。明日になるまでには終わるからさ」

「そうか？なら失礼する。先に食堂に行っているぞ」

「ああ………いつてきな」

俺は長門が執務室から出ていった後にお茶を飲む為に準備しようと歩こうとしたら俺は目眩がした。

しかも、まともに立てないほどに………

コレはヤバイと思いつながら座り直して薬を飲みながら仕事をしていたがやっと仕事が終わった。

今の時間を見てみると深夜4時だった。さすがに眠くなってきたから寝ようと布団に入ろうとしたら俺は意識を失った。高雄 Side

私は執務室で仕事をしている提督に、お茶を出そうと思い執務室に入る前にノックをしました。すると普段なら提督の返事が聞こえる筈なのに今日は聞こえませんでした

アレ？つと思いながらも私は、もう一回ノックをする。それでも返事は無かったの
で、おかしいなと思っていた手を出すとらカギは閉まっていなかった・・・つまり
開いていました。

執務室を見たら、いつも提督が椅子に座って仕事をしているのに今日は、いなかった
ので提督の部屋をノックをしました。

するとやっぱり返事は、ありませんでした。もう一度ノックをしても返事は、ありま
せんでした。

不安になった私はカギはしていなかったのか提督の部屋のドアもカギは開いていま
した。

私は提督のドアを完全に開けた瞬間、私は驚きました。

なぜなら提督が倒れていたのですから……。「提督、提督、大丈夫ですか」

私は何度も提督を呼んだが返事が無かった。私は執務室に戻って全体放送が使えるスイッチを押して長門を呼んだ

「長門いまから大至急、執務室に来て」繰り返します

「長門いまから大至急、執務室に来て」

私は全体放送を使った後に提督が、いる部屋に戻って長門が来るのを待っていた。

このまま提督が起きなかったら、どうしようと私は思っていた。

第22話

長門Side

私は食堂に、いたが全体放送で高雄に呼ばれた為今は急いで執務室に向かっていた。そして執務室に着くとドアが開いていた状態だったので中が見えた状態で執務室に提督が、いなかった

私は執務室のドアを閉めてカギをかけて隣の提督の部屋に行くと高雄と提督が、いたが提督が倒れていた。

「提督大丈夫か提督……高雄いったい何があつたのだ？」

「私が執務室に着いて執務室をノックしても提督からの返事が無くて私は隣の部屋を見ても提督が倒れていたの」

「とりあえず今は医務室に連れていかなければな。私が提督を医務室に連れていくから
高雄は執務室で待機してくれ」

「わかりました」

「提督、今から医務室に連れていくからな」

私は提督を医務室に連れて行く為に提督の部屋と執務室から出ていき医務室に向
かった。

それから、少し歩くと医務室に着いたので私は医務室のドアを開くと誰もいなかった
のでカギを締めた後に提督に菓を飲ませてベッドに寝かせた。

(しかし提督はいつ倒れたのだろうか?)

私はそれを考えていたが今は提督の側にしよう。そして提督が起きるまでは離れな
いようにと私は決めた。

高雄 Side

長門が提督を医務室に連れて行った姿を見た後に私はなぜ提督が倒れたのかを考えていた。

(仕事は、ちゃんと終わらせていたにも関わらず提督が倒れていたのは……) 私は今回の提督が倒れた後の話を考えてました。

提督は私達を大切にしてくれる人で私達の事を考えて行動してくれますが提督が倒れた今は誰が提督の代わりに、みんなを、まとめるのだろうか？と気になった私は長門がいる医務室に行きました。

医務室に着いたので私はノックをして中から長門の返事を聞いた後に失礼しますと言いながら医務室の中に入っていきました。

医務室に入ると長門と提督の2人が、いましたが私は長門に話かけました

「提督が倒れた今コレからどうするの？」

「提督は、もし今回のような事が、あった場合は秘書艦の私に任せると言っていた」

「それじゃあ長門が提督の代わりに……」

「ああ……秘書艦の私が提督の代わりをする事になった。高雄は今から全員を食堂に集めてくれ。私が全員にコレからの事を話す」

「わかりました。それでは失礼します」

私は長門と話が終わった後に医務室から出ていくと執務室に行きました。その後、全体放送を使って全員に伝える事にしました。

「全員に告げます。今から食堂に集まってください、大切な話が、あります」
繰り返します

「今から食堂に集まってください、大切な話が、あります」

私は、その後、執務室を出て食堂に向かって行きました

第23話

長門Side

私は食堂に向かって歩いていった。そして今回の事について全員に話さなければならぬが驚くだろうなと私は思っていた。だが気づいたら食堂に着いたので食堂に入ると私以外の艦娘が全員揃っていた。

そして私は全員に話をする為に前に出た。

「今回は高雄以外の全員に大切な話があるから良く聞くように、その中で私に質問したい人は私の話が完全に終わったら手を上げて質問するように。」

「まず今回の大切な話だが提督が倒れてしまった事だ」

ザワザワ・ザワザワ

(やはり高雄以外の全員は驚いているな)

「全員静かに、高雄は知ってるから何も言わんが提督が復帰するまで私は提督の代わりをする事になった。しばらくは絶対安静にする為に私と高雄以外は全員、医務室に來なように」

「私からの話は以上だ。質問したい人は、いるか？」

「はい、長門さん。司令官は、いつ倒れたんでしょうか？」

「それは、わからない。だが昨日までは確かに大丈夫だったはずだ」

「提督は、いつ元気になるデース」

「医務室で薬を飲ませた後に休ませたが、いつ目覚めるかは、わからない」

「提督が、いる医務室に何で鈴谷達は行っては、いけないの？」

「提督は今まで仕事をしていたと言っても量が、かなりあつたので提督自信に、かなりの負担が、あつたはずだ。私達が大人数で行つても提督が休まらないかも知れないからな」

「提督が倒れてしまったのなら誰が提督の代わりをするのですか？」

「それについては秘書艦の私が提督の代わりをする」

「他に質問したい人は、いるか？……いないようだな、それでは全員解散だ。高雄は私と一緒に執務室に来てくれ」

「わかりました。それでは執務室に行きましょう」

私は高雄と一緒に執務室に行つて執務室の中に入ると私は提督が普段から座つてゐる椅子に座つて仕事を始めようと準備をした。

「なら私は秘書艦の椅子に座つて手伝うわね」

「ありがとう。それでは始めようか」

私は今回が初めてだが提督代理をする事になって不安も無くは無いが私は 提督が教えてくれた提督のやり方で全員を纏めようと考えていた。

「私は提督が目覚めるまでは提督代理をする。高雄は提督が目覚めるまでは私の代わりに秘書艦を頼む」

「わかりました。それでは私は長門の代わりに秘書艦をやりますね」

私は高雄に秘書艦を頼んで私は提督代理をする事になった。

私は明日から頑張ろうと思っていた。

しかし・・・提督が目覚めてくれれば全員が安心してくれるから早く目覚めてほしいなっと私は思っている。

第24話

長門Side

私は今、提督室にいる。提督が倒れた今は私が提督の代わりをしなければならぬからだ。さて今日は何をしようかと思つて見たら資材が少しだけ少ないな？つと思つた私は何人かを遠征に出そうとしていた。

そう考えているとノックの音が聞こえたので私は返事をする。と高雄が執務室に入つて来た

「それじゃあ今日から私は秘書艦ね」

「そうだ。私は提督代理だから提督が元気になればまた秘書艦に戻るがな」

「早く元気になるといいね」

「ああ……そうだな」

私は高雄と一緒に執務室で提督がしていた書類の仕事を始めた。

私が執務室に、いない時は提督が、していたのだが……今日は多いなつと私は思っていた。

私が秘書艦の時は半分やって残りの半分は提督が、やっていた。

それで何とか夜6時までには終わらせていたのだ。

しかし、もしもの話だが、この量を私が秘書艦としての時間が終わった後に提督が一人で毎日やっていたとしたら……それは精神的に疲れるだろうし寝られなくなってしまうだろう。そして最終的には今回みたいに倒れてしまったんだろうな。

私は、いいや私達は提督を無理させたくないし

そう考えると提督は、いつ寝て、いつ起きてるんだろうか？提督の事を考えると気になつていた私だったがコレ以上は考えるよりも仕事を始めた方が、いいなつと思いき

始めた

「やってみて、わかるけど提督はコレを長門と一緒に、やっているのね？」

「ああ、そうだ。その半分は提督が、もう半分は私が、やっている。」

「何時ぐらいまでしているの？」

「夜の6時に秘書艦の仕事は終わりだから夜の6時までだな」

「以外と長い時間なのね？」

「だが休みの日は2日も、あるし色々、やりたい事も、やらせてくれるし提督のいる、この鎮守府は、まだいい方だと思うぞ。こここの鎮守府は今の提督が、いる限りはホワイトなんだ」

「それは……そうね」

「他の場所では、どうか知らないが、この場所は私達全員が今の提督に対して何の不満は

無いんだ。だったらコレ以上は提督に何を求めるって言うのだ」

「今は提督が元気になる事が大切だからね」

「そうだ。その為にも私達は頑張らなければな」

「それに……私は戦艦長門だ。他の人達から頼りに、されるような人で、ありたい。提督が私に何かをしてほしいとか何かを持つて来てほしいとか何かを運んでほしいとか、そういったように提督が私に何かを言う事は確かにある。だが、それは提督が私に無理矢理やらせるような事は絶対しないからだ。そんな事をすれば艦娘の私達が反逆するからな。提督が私に何かを頼む時は私に今、出来るか、どうかを聞いてくるから私は安心して話を聞く事が出来る」

「長門は提督の事を信じているのね」

「当然だ。少なくとも私は今の提督に不満は無いのだからな」

第25話

長門Side

私は高雄と一緒に執務室で仕事をしている。お互いに集中して仕事をしているから会話が無いが変わりに書類の枚数が減ってきた。このペースだったら何とか夜までには終わらせられるなつと私は思っていた時に高雄が話しかけてきた。

「長門そろそろ休憩にしない？」

「もうそんな時間か？わかった。そうしよう」

私は今の時間を見てみると午後3時だった。秘書艦の終了時間まであと3時間ギリギリ間に合うぐらいだなつと私は思っていた。

「長門、お茶が熱いから気を付けて」

「ああ……だが温かくて、いいな」

私は高雄が持つてきてくれたお茶を飲みながら休んでいると提督の事を考えていた。

（もし平和になったら私達は、どうなるんだろうな？ 提督と一緒にいられるのだろうか？ 少なくとも私は提督の隣に、いたいな）

お茶を飲み終わったので私は高雄に話しかけた。

「今から提督のいる医務室に行ってくる。高雄も行くか？」

「そうね。私も心配だから行ってみます」

私達は提督が気になったので医務室に向かって歩いていった。

医務室に着いて中に入り提督の様子を見ると、やはりまだ目覚めていなかった。

「提督は大丈夫よね？」

「命に別状は無いから安心だが、いつ目覚めるかは、わからないがな。」

「生きてるだけ、まだいい方って事？」

「そういう事だ」

「もし死んでいたら私達は全員悲しいだろう？」

「だけど生きてさえいれば私達と話だって出来る。」

「それは、そうですね」

「今は提督が目覚めるのを待つだけだ」

「提督が目覚めたら今後は今回のような事にならないように注意をしなければならな

い」

「また倒れてほしくないからね」

「私達2人以外も全員心配しているからな」

「けど他の人達も出入りしても良かったんじゃない？」

「私達と同じ最初からいる者だったら良かったんだがな。後から入ってきた者達では、どう対処すればいいのか、わからないだろう？」

「それは……」

「私達2人は最初からいるからまだわかる。だが他の人達では今回のような事が起きた場合すぐに判断が出来ればいいが出来ない方が、ほとんどだ」

「緊急事態とか発生した時に私達2人が、いなかったら？その時は今いる者達で判断するしかない。だからこそ今は無理って事にしてある」

「他の人達は、その答えに気付ければいいのだけど」

「勘の鋭い者ならば気づくはずだ。仮に気付いたとしても出来なければ意味は無いのだから」

「さて続きをやるとしよう。高雄また手伝ってくれないか？」

「わかりました。戻りましょう」

第26話

長門Side

提督が倒れて気づいたら1週間が経った。今の私は高雄と一緒に執務室で休憩をしながら提督の事を話していた。

なぜなら執務室に来る前に高雄と一緒に医務室に行ったら提督の顔色が良くなったので、そろそろ目覚めるか?と思っているからだ。そうなれば私は秘書艦としてまた提督を支えるつもりだからだ。

もし提督が目覚めたなら私は他の人達に連絡する必要もあるからだ。

それに、その連絡を聞いた金剛辺りが執務室に突撃してくるだろうとも私は思っていた。

金剛は提督LOVE勢だと他所の鎮守府で聞いた事あったからな。

しかし早く他の、みんなを安心させてやりたいものだ。だが私は気になる事が一つある。

提督の事だからまた無理をしそうな雰囲気を感じるからだ。今回は高雄が一番早く倒れた提督を見つけてくれたから良かったが……私は提督の事を考えていたら誰かが執務室を3回ノックをしてきた。

私は誰だろうか？　つと思ひながら返事をすると思つたのは扶桑だった。

提督まだ目覚めないのですか？

ああ、提督が目覚めたら他の人達に知らせるつもりだ。

そうですか、私達は今とても気になっていたので執務室に来て聞きに来たんですよ。

そうか、だが心配してくれてるって言う気持ちがあれば提督が目覚めた時に提督の事だ。悪いなつと思ひながら謝るはずだろう。

提督の事を良く見ているのですね。

秘書艦だから常に提督の隣に私が、いるさ。仮に私が提督の近くに、いなくても高雄が私の変わりに提督の隣に、いるだろう。

秘書艦について聞きたいのですが秘書艦は固定なんですか？

そうだ。提督が言うには秘書艦を変えながら、やると次の秘書艦に変わる時に何をやって何をやってないかの連絡を忘れそうだから嫌だと言っていた。

だから提督は私を秘書艦に固定したみたいなんだな。

同じ秘書艦だったら何をやらせるか何を頼むか、そういう行動をさせやすいとも言ってたのでな。

そうなのですか？なら仕方ありませんね

それでは私は聞きたい事を聞き終わったのでコレで失礼します。

そうか？わかった。

私は扶桑が執務室から出ていくのを確認すると私は執務室の掃除を始めてみた。

提督が執務室に入ってきた時に執務室が汚いと誰だつて嫌だと思ふから綺麗にしよ
うと思ひ、私は掃除を開始した。提督としての仕事？実は終わらせていた。

私は今回の事で提督に言いたい事が出来たので私は忘れないように覚えとかなければと気を付けながら考えていた。

第27話

私は高雄と一緒に執務室で仕事をしながら提督に言いたい事を考えていた
だが起きた場合すぐに言った方が、いいのだろうか？

今の提督のやり方と考えについて誰かに聞いても提督以外だったら確かに答えてく
れるだろう。

しかし最終的に決めるのは秘書艦である戦艦長門の私では無く提督だから何も言え
ない。

だがこの鎮守府の提督は他の人達から良いように思われている。

私と高雄は最初からいるから信頼と信用しているが他の人達までは、わからなかつ
た。

だが提督が誰かに恨まれたり提督が誰かに殺意を出されたりのそういった感情を持つてる人いないだろう。

もし本当にそんな事になっているのであれば私達が気付かない筈がない。私は自分の分を終わらせて高雄も自分の分が今やつと終わったみたいだ。だんだん量が多くなってきたなつと思いつながらも高雄に話しかけた。

終わったか？少し休まないか？

そうね。そうしましょう

高雄が、お茶菓子などを用意して私は、その間に書き忘れが無いかの確認をしていた。

長門？準備が出来ましたよ。

ああ……今いく

私は高雄と話をしながらお茶を飲んでた。私達2人は提督を除けば一緒にいる時間が多い。

だからこそ私達2人が今いろんな面で、しつかりしないといけない。

何が、あつてもすぐに対応が出来るように考えながら動かなければならない……

もし今この鎮守府が襲われた場合は提督が真っ先に死んでしまうからだ。

それに提督が今は動けない状況なのだから無防備でもある。

出来るだけそうならない為に今は警備を何人かにしてもらっている。

正面の出入口に6人いて鎮守府の中にも6人いて提督の護衛は私達2人がしている。

そういえば今は提督が目覚めていないから仕方ないかも知れないが私が提督の変わりに提督代理をしているが全員に避ける練習をこの1週間でしつかり特訓させた。

そうした事で全員が全員誰の攻撃にも当たらなくなった。もしかしたら提督の言い

たかった事は、この事なのかも知れないなと私は思っていた。

もしこのままいけば提督の言う通り誰も沈まないようになるからだ。

高雄と何だかんで話をしていたら休憩して1時間も経っていたので私は高雄に話しかけた。

そろそろ医務室に行つて提督の様子を見に行かないか？

そうですね。では一緒に行きましようか。

あれから毎日のように私達2人は医務室に行つて提督の様子を見に行っていた。

私達2人は医務室に入って提督の様子を見ようと顔を見たら提督が目を覚ました。

第28話

俺は昨日の夜に倒れてしまつて気付いたらどこかのベッドに寝ていた。

俺は目を開くと目の前には長門がいた。そして長門の隣には高雄がいて2人とも俺を見ていた。

アレ……ここは？どこだ？

ここは医務室だ。提督

提督が……目を覚ました。

なあ長門……俺が何時間ぐらい寝ていたんだ？

実は提督が倒れて数時間じゃないんだ。

? どういう事だ?

提督は数時間だと思っているかも知れないが実際にはアレから1週間が経っているのだ

……聞き違いか? 今、長門が1週間だと言ってたのは

いいえ。聞き違いでは無いです。アレから1週間って言う時間が経っています。

何だと、てつきり俺は数時間ぐらいだと思っただが……

提督が倒れた理由については疲労と寝不足によるものです。

今の状況どうなっている?

今は私が提督の代わりに提督代理をして他の人達に指示を出している。そして高雄

が私の変わりに秘書艦をしてもらっている。

今の資材についてどうなっている？

何人かの人達を遠征に出して倒れる前ぐらいには資材は回復した

俺が、みんなに言った特訓は？

避ける練習については私も含めて全員が相手の攻撃に当たらなくなった。油断したり慢心したり傲慢にならなければな

食材について今どうなっている？

食材の方が間宮が管理している。そして昨日の朝にまた新しい食材が来たから食事については大丈夫だ。

他に気になる所あったか？

今の所は何もありませんが提督が倒れた事に私達2人以外の人達が不安になってい
るようです。

そつか……1つ1つ答えてくれてありがとう。それじゃあ今から俺が提督とし
て……

まだダメだぞ提督。少なくとも今日1日はな

今日の医者の話では今日は念の為に絶対安静にしているようにと言われています。
そつか……医者が言うのならば確かなんだろうな。

じゃあ俺は明日から頑張るとしようか

はい。そうしてくれると私達は嬉しいです。

高雄、今から執務室に行つて俺が目覚めたと全体放送で全員を安心させてくれ。

わかりました。それでは失礼します。

長門……俺の変わりに提督代理をしてくれてありがとうな。

何を言ってる。提督の変わりに提督代理を出来る者は戦艦長門である私か高雄の2人の内どちらかしか出来ない事だろう。

そうだな。あつ今から医務室を出ていくだろう？高雄と会ったら明日の話だが明日の朝7時に全員を食堂に集まるように言ってくれないか？

明日の朝？何かをするのか？

みんなに迷惑をかけてしまったからな。全員に料理でも作ってやろうと思つてな。

それは、いい考えだな。

長門と高雄の2人は執務室に来てくれ。

わかった。高雄に話しておこう。

第29話

俺は今、自分の部屋で倒れた時の事を考えていた。昨日の話だが長門と高雄の話聞いて衝撃を受けていた。俺は数時間ぐらいだと思っていたからだ。けどまさか一週間も時間が経っていたとはな。俺は着替えて自分の部屋から出て行って執務室に入った。その後は椅子に座って5分ぐらい経つとノックの音がしたので俺は、どうぞつと返事をした後に入つて来たのは長門と高雄だった。

提督おはよう

おはようございます。提督

長門と高雄もおはよう。さてそれでは食堂に行こうか？

ああ、そうだな

はい、わかりました。

そういえば提督に1つ聞きたい事あるんだが

どうしたんだ？長門

私達が執務室に入って提督と会って今は食堂に向かって歩いてるが……それ
だったら最初から執務室に來させる意味は無かったのではないか？

そう言われてみるとそうですね。

良く気付いたな。実は執務室に呼んだのは理由があるんだよ。

1つ目は俺が2人の元気な姿と顔を見たかったって事。

2つ目は俺は確かに執務室にいたんだって事を認識させる事。

俺が倒れてからは全員の元気な姿を見てなかったからな。気になってるんだよ。

なら仕方ないな。確かに提督の姿を見れば他の人達も安心が出来るな

私達2人は、ともかく他の人達は提督と会う機会が少ないですからね。

さて食堂に着いたな。それでは久しぶりに入るとするか。

（俺は食堂の中に入ると俺達3人意外の全員が揃っていた。俺の右には長門が俺の左には高雄が隣にいる）

みんな久しぶりだな。今から俺の話聞いてくれ。俺は目覚めた後に長門と高雄の話聞いた時は驚いた。それもそうだろうな。俺は自分では数時間ぐらいの時間が過ぎてるっと思っていたら実際は1週間も時間が経っていたのだからな。そして俺が倒れてから倒れるまでに長門と高雄もそうだが他の人達にも迷惑をかけたなり心配させただろう。だから今日は今この食堂にいる全員に俺は料理を作ってみようと思う。間宮

とかと比べたら美味くは無いかも知れない作れる料理が少ないが人に出しても不味くは無い料理だったら俺は作れるからみんな俺が作れる料理を食べてみてくれ。間宮さん。食材ありますか？

食材は沢山ありますから大丈夫です。

よし、それでは今日の夜は俺が食事を作るから楽しみにしておけよ。

それじゃ俺からの話はコレで終わりだ。それでは今から全員は朝ごはんを頼んで食べてくれ。長門と高雄も朝ごはんを食べ終わったら1時間後に執務室に来てくれ。

わかった。1時間後だな

わかりました。それでは失礼します。

2人とも、また後で会おうな。

(さつとて久しぶりに料理を作るからな。気合いを入れないと、その前に俺も朝ごはんを執務室で食べてから今日1日の事を考えるとするかな)

よし久しぶりに今日1日頑張るぞ。

第30話

俺は今めずらしく食堂にいる。何故なら今日の夜は俺が夕飯を作る事に決まったので今は夕飯の準備をしていた。

何せ俺を抜けば14人もいるのだから今の時間は午後3時になったばかりだ。誰かが手伝ってくれるのならともかく今から準備をしないと料理を作る時間も考えて間に合わないからだ。

その為にも今は使う分だけの野菜を洗って包丁を使って切っている。いつもの仕事は、どうしたって？そんなのは朝の内に終わらせた話だ。

料理を作っている間宮さんにも手伝いませうか？つと聞かれたが今回お断りをした。自分で言い出した事だから自分でやらないといけないからだ。

自分で言い出したにも関わらずそこで誰かに頼ってしまうのは何か違う気がするか

らだ。それだったら最初から言うんじゃないやねえよって話になる。

自分で言い出した事なんだから自分で考えて自分で決めて自分で行動する。

わからない所あるんなら聞く事、知らない所あるんなら聞く事

このように知らない、わからない所なら誰かに聞けばいいだけの話なのだから……

つと考えながら使う分の野菜を洗っていたので次に切る事にした。大きすぎると食べにくいからだ。一口サイズに切れば食べやすいからな。

俺はレタス、トマト、きゅうりを切った。トマトは頭の部分を取ってから半分に切る。そうすると今のトマトは半分、半分で分かれた状態になるからだ。

そして半分、半分になったトマトをまた半分に、また半分にすると、ちょうどいいサイズになったから今度はレタスを切った。レタスを切り終わったら今度は最後まできゅうりを切る。

きゅうりは最初はじつこの部分を両方切って取り除く、そしたら今度きゅうりを半分に切ります。そうすると最初のトマトみたいに半分、半分になりましたよね？

今度はこれをナナメに切ってスライスする感じに切ります。

残り半分の、きゅうりもナナメに切ってスライスする感じに切ります。

そうすると最後きゅうりのナナメに切っていない部分だけしか残ってませんよね？コレは捨てちゃいます。

後は、お皿にレタス、きゅうり、トマトを乗せれば野菜サラダは完成です。サラダに何を使うかは人によって違うから使わないでおきます。そこは好きな味で

次に俺は味噌汁の準備をしていた。お味噌汁の中身は・・・お豆腐とワカメに決めた。

メインのおかずについてだけ・・・何が、あるかな？つと冷蔵庫を見ると鮭が、

あったのでコレと野菜炒めに決めた。

俺は今の時間が気になったので時計を見ると6時になっていた。以外と時間が建つのは早いなっと思いつながら俺はラストスパートに入る。

野菜炒めは油を全体に広げたらニンジン、もやし、たまねぎ、ニラ、を入れて塩こしよ
うで味付けして良く混ぜる。そして全体に味が付くようにしてからお皿に盛り付ける。

鮭はフライパンに油をやって全体に広げたら鮭を乗せて鮭の上にバターを乗せる。
そしてフライパンにフタをして待つ。この時にフタをしないと油が跳ねて火傷する事
になるからだ。

お味噌汁の、お豆腐は縦2回、横に2回切って入れる。お豆腐は足が早いから気を付
けないといけないが今日食べる分には大丈夫だろう。後はワカメも入れて味噌も入れ
てので味噌汁は完成しました。

14人分を一気に作るのは大変だよ。ごはんについては全員どのくらい食べるか、わ

からないから多目に炊いておいた。残ってもラップをして冷凍に入れればいつでも食べられるしな。

そんなこんなで、やっと料理が全部完成したら料理の匂いに誘われてきたのか間宮さんが入ってきた。

もう料理が出来たのですか？

もうどころじゃなくて、やっとが付くけどな。ちようどいい所に来た。悪いが執務室に行つて全体放送を使って全員を食堂に呼んでくれ。

わかりました。それでは失礼します。

間宮さんが食堂から出ていって全体放送を使って、それから5分後・・・

「いい匂いだね」

「美味しそうですね」

「早く食べたいです」

「等々の言葉を俺は奥で聞いていたが料理は暖かい内に食べないと不味くなってしまうので全員を呼んだ。」

「全員1列に並べ。並んだ人から渡してやるから」

「そう言うと全員1列に並んで全員に俺が作った料理を渡した。」

「これで全員に俺が作った料理が行き届いたな？それじゃあ全員で言うぞ。頂きましよう」

「いただきます」

第31話

全員が今、俺が作った料理を食べている。みんなの口に合うだろうか？俺は不安になりながらも思っていた。

「おいしい」

「美味しいな」

「おいしいね」

どうやら全員が俺の作った料理を食べて美味しいと言ってくれて俺はホッとした。

もし不味いって言われたらどうしようって思ったからだ。

「提督おかわりをお願いします」

「ああ、わかった。」

「あつ私も」。

「私もおかわりを」

「わかった。わかったから落ち着けよ。おかわりしたい人は1列に並べ、並んだ人から渡してやるよ」

まさかのおかわり発言に俺は驚いたが俺の作った料理を食べて楽しく話をしながら笑っている姿を見て俺は安心した。

俺は全員の姿を見た後に1つだけ気づいた。それは使った食材が少なくなっている事に気付いたからだ。

料理をする前は、こんなに食材の量が少なくは無かったと俺は見えて思っていた。そして間宮さんが俺に近づいて来て話しかけてきた。

「以前の話ですが提督は私達にお店を出していいと言いましたよね？」

「ああ、確かに言ったな。」

「それで何ですが実は今は全員こうやって食べていますが中には、この後に私達の店に来てまた追加で食べようって人がいるんですよ」

えっ、そうなの？それは知らなかったぞ

「それなんで私達あの子達に来る前に食材を運んで今の内に確保しておいてるんですよ」

なるほどな、だからか。俺が食材を使って料理を作ったにも関わらず思っていた以上に食材が少ないのは

「はい、それなんで食材を多目にしてほしいですけど・・・」

理由が理由だしな、わかった。許可してやるよ。食材に関しては多目に俺が頼んどいてやるよ。

「ありがとうございます。」

まだ料理は残ってるから食べたきやいいな、渡してやるから

「わかりました」

俺は全員で楽しく過ごせるように今いる全員から見えて俺が提督で良かったと思ってくれるような、毎日笑って、毎日楽しく、そして誰も沈まないで平和になった世界を俺は見たいと思っていた。

俺は初期の頃と比べたら、確かに人数は増えたけど、不安な所もあるって言えばある。

後は俺の特訓の成果で全員が生きて帰ってこれるのか？俺は誰も沈んで欲しくない、

例えケガをしても生きて帰ってくればケガを治した後にまた戦えるのだから無理は、して欲しくない。心配か？と言われたら心配だし俺としては出撃も本当ならば、させたくは無いが仕方ない。けど俺は全員が無事に帰ってくるのを祈るだけだ。

だけど、まさか、あんな事が起こるとは思わなかった。そう、この時は……ただ俺達は知らなかったのだから

それが、わかるのは、この日から数日後が経ってからの話なんだから……

第32話

俺は執務室で長門と一緒に仕事をしていたがもう少しで終わりそうだったので俺は放送で高雄を執務室に呼んでいた。

失礼します。提督お呼びでしょうか？

実は、もう少しで仕事が終わるから言うのだが今から1時間後に長門と高雄、以外の全ての人達をグラウンドに集合させてくれ

私達2人以外の全員を集めるのですか？

ああ、今度は避ける練習じゃなくて当てる練習だ。理由は全員が集まったら言うからな。高雄は全員に伝えたら執務室に来てくれ。長門と一緒に頼みたい事が、あるんでなわかりました。それでは失礼します。

高雄が執務室から出ていった後に俺は隣にいた長門に話かけた。

もう少しで仕事が終わるから終わったら高雄が来るまで休憩にしよう。高雄が来たら運んで欲しい物があるんだ。

わかった。ならば頑張つて終わらせなければな

それから20分後に仕事が終わったので俺は長門と一緒にお茶を飲んでいた。しばらくすると執務室のドアからノックの音が聞こえてきたので返事をする。高雄が入ってきた。

失礼します。提督、全員に伝えてきました。

ありがとう高雄、高雄も少し休憩してくれ。お茶が、あるから飲んでいきな。

ありがとうございます。

それを飲んで30分ぐらい経ったら長門と一緒にグラウンドに向かうけど向かう時に

コレを運んで欲しい

コレは……水鉄砲ですか？

そうだ、しかも水が入っていて、かなりの数が入っているから重くなっているが、コレを俺と長門と一緒に運んで欲しい。

わかりました。

長門は俺の部屋に来てくれないか？まだ出してない物あるんでな。

わかった。手伝おう

私は、いつも提督に何かを頼まれる事が、あるけれど私は提督について考えていた。提督は秘書艦の長門と一緒に執務室で仕事をしていて私は執務室にいる提督に頼まれる事が多かった。けど嫌では無かった。提督の事は嫌いでは無い、みんなを大切に思っている人ではあるが自分の事を考えないから心配になる事が、あるからだ。

(今回は大丈夫でしょうか?)

私は心配しながらも休憩した。

私は飲み終わったので提督と長門と一緒にグラウンドに運んでいく。

グラウンドに着くと私達3人以外は全員が集まっていた。

全員よく集まってくれた。今日は全員に別の特訓をする。それは……当てる練習だ。

当てる練習ですか?

最初に避ける練習をさせて今度は当てる練習をさせる。コレをする事で全員には、あ
る事が出来るようになる。それは当てる避けるやり方……その名もヒット&アウエ
イだ。

ヒット&アウェイ……

コレを全員が出来るようになれば嬉しいんだぞ？

1つ目↓当たらないから沈まない

2つ目↓敵に当てられ続ければ敵を沈めながら弾丸の節約にもなるし消費も抑えられる

3つ目↓全員が無傷で生き残れる確率が高くなる

4つ目↓孤立したり誰かと一緒にいたにも関わらず離れてしまったり、どんな状況になったとしても生き残れる確率を上げながら誰かが助けに来るまでの時間を稼ぐ事が出来るようになる。

このように全員の生き残れる確率を少しでも上げるようにする為にも俺は今回この特訓をする事に決めた。

ちなみに今回の特訓は全員だ。秘書艦の長門や高雄も特訓するからな。

全員、俺の右手を見てくれ。今回の特訓は、この水鉄砲を使って特訓するぞ。ゼツケンの色が青のチームと、ゼツケンの色が赤のチームで別れるから

2チームに別れて5分後に開始だ。

当たった人数が少ないチームの勝ちだ。簡単だろう？

ちなみに青チームの旗艦は長門で赤チームの旗艦は高雄だ。

旗艦以外の人は自分で行きたい色のチームに行ってくれ

チームが決まったら開始するからな。

どうする？

どのチームに行こうかな？

私は青に行こう

私は赤に行こうと・・・

よし全員チーム毎に別れたな、それでは特訓を開始する

5秒前からいくぞ。

5、4、3、2、1、始め

第33話

俺は秘書艦の長門を含めて今度はチームに別れて当てる練習をさせている。

最初は今まで避ける練習をしていたからか中々相手に当てられなかったけど、やっと当てられるようになってきた。

ちなみに当たるまでに、かかった時間は10分だった。当たるまでに10分で、それまでは相手の攻撃を避けてたから良い方だと俺は思っていた。

後はコレを繰り返し返せば相手の攻撃に当たらないで、避けながらコツチの攻撃は当て続けながら救援を待つような状態になるな。

もし、このやり方が成功すれば少なくとも1回も沈ませる事なく無傷で帰って来るっていう事が出来るようになるからな。

そして次に他から演習を頼まれて勝負させてもコチラは全員無傷って事になるし俺としては嬉しい限りだ。

気付いたら30分も時間が経っていた。

残り物30分か……果たして勝つのは、どっちかな？

1番最初に当たった事を除いてそれ以降は当たってなかった。このままだと青チームの勝利だが……つと思つた次の瞬間、終わる2分前に赤チームが青チームの誰かに当てたようだ。

そして時間になったので俺はホイッスルを使って全員に知らせた。

「ピッピッピー……それまでだ。全員集合」

俺が呼ぶと全員が集まってきたので俺は話しかける。

「全員お疲れ様。さて今日の当てる練習を全員にさせたが、どうだった？長門、高雄、お前達はチームの旗艦だったから聞くが当てにくいなって思わなかったか？」

「確かに……それは思いました」

「ああ以外と苦勞したな」

「そうだろうな、だがアレこそが俺の目指しているものだ。相手の攻撃を避けながらコツチの攻撃は当て続けながら相手の数を減らして救援を待つ事が出来るからな。しかも初めてやらせたと言っても当たるまでに10分かかった。コレは最低でも5分は無傷でいられたって話にもなる。だからコレは当てる練習と避ける練習を繰り返せば最高で1日は避けられながら当て続けられるようになるし全員が無傷で帰ってきなから沈む確率が0にもなるからな」

なるほど、だから提督は私達に、この2つの練習をさせていたのか

「良く気付いたな、長門。そうだ。特に避ける時間は大切だ。どんな攻撃も当たらなければ意味ないんだからな。俺のスローガンは……当たるな、避けながら当てろだ。」

今は無理でも何回か、やれば全員もう相手の攻撃に当たらないし自分の攻撃を相手に当てられ続けるようになるぞ。

そんな事が出来るようになるんですか？

「違うな……間違っているぞ。なるのか？じゃなくて、なるんだよ」

今は俺の言葉の意味が、わからなくても、いずれわかるようになる。

さて俺からの話は以上だ。それじゃあ全員解散しろ。

提督その前にいいだろうか？

どうした長門？

提督は、この2つの練習を繰り返し返せば当たらないようになるって言ったな

ああ、確かに言ったな。

それをする目的は何だ？沈まないようにする。当たらないようにする。当てられ続けられるようになる。この3つ以外にも目的があるんじゃないのか？

流石だな。長門、確かに理由は、それ以外にあるぞ。

高雄、その理由は何だか、わかるか？

えっと……資材を貯める為と資材の節約の為ですか？

良くわかったな高雄。そうだ、それが理由だ。

何が起こるか実際わからないからな。何が起きてもいいように貯められる内に貯めておきたいんだよ。

その為にもこの2つの練習は大切だつて事だ。

なるほど、そういった理由だったのか

他に質問ある人いるか？・・・・・・・・いないなら全員解散。

濡れた人は入渠してカゼを引かないように気を付けろ。

それと秘書艦の長門と高雄は執務室に来るように
わかった。

はい、わかりました。

俺は先に執務室に行ってるから、また後でな

第34話

俺は執務室に戻ってから長門と高雄が来るまでに掃除をしていた。掃除をしていると執務室のドアからノックが聞こえたので返事をする。と長門と高雄の2人が入ってきた。俺は掃除道具を片付けてから2人に話かけた。

さて2人とも今日の訓練お疲れ様でした。今回の訓練は2人から見えてどう思った？

そうだな、当たらなかつたが当てにくかつたな

そうですね。私達が当てるまでに時間かかりましたからね。

けど全員に今回の練習を何日か練習させたら当たらなくなるから大丈夫だ。いつ敵が攻めてくるか、わからないからな、だからこそ徹底的に練習させて生き残れる確率を上げなければならぬ。それに俺は不安なんだよ。避ける練習と当てる練習をさせたにも関わらず誰かが沈むんじゃないかって心のどこかでは思っているからな。

そりゃあ誰にも沈んで欲しくない。当たつても生きていてほしい。そう思つてしまふんだよ。だから長門と高雄の2人だけに言うが2人は絶対に何が何でも俺がいる場所に帰つてきてくれ。俺は2人が沈むなんて嫌だからな

ああ、殴りあいなら、この戦艦長門に任せておけ。

私も……いいえ私達は沈みませんよ。必ず提督の所に戻ります。頼もしいな、今から大切な話をするから良く聞いてくれ。

俺はワザと2人に見えるように全体放送のスイッチを入れた。長門と高雄も確認して頷いた。

それと……長門と高雄の2人は最初からいる人達だから言うが、もし万が一の話だが俺の身に何かあつても躊躇うな、最初にも言ったが秘書艦の長門に俺の全権を託す。もし俺が死んだりしたらお前らの好きなように動け。その時は頼むぞ。第1艦隊
総旗艦長門型1番艦戦艦長門

何を言ってるんだ。提督

そうですよ。急に何を……

その内に何だか嫌な予感がするんでな。念には念を入れて起きたいんだよ。

……わかった。その時は我々の判断で行動しよう。

次の話だが、もし俺が死んだりして次に来る提督が、お前達に酷い事をするようならば殺したって構わない。

ソイツの言う事は絶対に聞くな

俺が以前に言った俺のルールに絶対に従うようにな。

わかりました。私達は提督の指示に従います。

何も起こらなければそれでいいんだがな……けど今の内にやれる内にやって置

かなければならぬからな。俺の今の目標は被弾0、撃沈0を目指している。

被弾0、撃沈0ですか？

そうだ。誰だつて当たりたくないし何よりも……死にたくないからな。それに姉妹艦と会えずに沈みたくは無いだろう？

確かにそうだな。

そうですね。

俺のいる鎮守府は他と比べると人数が少ないからな。やる事は多いが協力してやれば何とかなるもんだ。1人がダメなら2人で2人がダメなら3人でつてな

いいか？自分で考えて自分で決めてそして自分で行動しろ。何かを、やるからには責任をもつて実行しろ。自分で出来ないって思った事は絶対に、やるな。自分が出来るような事をしろ。わかんない所が、あつたらドンドン聞け、聞く事は悪い事じゃないんだから、わかるまで聞け。聞く事は大切な事で、あつて恥では無い。

……その言葉、覚えておく

・
・
・
・
・
わかりました。

第35話

今回の俺は執務室で仕事が終わった後に全員の避ける練習と当てる練習を見学していた。繰り返し2種類の練習をさせているからか避ける事に関しては全員が大丈夫になったが当てる方に関しては、まだまだ違って感じだった。しかし当てられなくても避けられ続ければ沈まないから安いもんだっと思っていた。

それから2日後……

俺は長門と高雄と一緒に食堂でお昼ごはんを食べていた。俺は長門と高雄とコレからの事についてを話していた。

何か足りない物あるか？

何か忘れてる物あるか？

こんな感じに話していて 俺は長門と高雄に確認をしていた。

長門が大丈夫だと言った後に高雄も大丈夫です。つと答えてくれた。

食べ終わった俺達は執務室に向かって歩いていった。そして執務室に着いたので俺は長門と高雄と一緒に執務室の中に入り仕事をしようと思ったその瞬間に誰かが走ってきてノックをしないで入ってきた。

提督、緊急事態です。

扶桑か……どうした？何があつた？

深海棲艦が攻めてきました。

何だと警備の者は何をしていた。

長門が扶桑に話していると扶桑が話の続きを言ってきた。

攻め込んできたのは種類は、ル級、レ級、ヲ級、イ級、チ級、二級、ホ級、ト級で、かなりの数です。

くつ、こちらの準備が整う前に攻めこまれるとは

高雄、放送を使うからスイッチを入れろ。

はっ・・・はい

この放送を聞きながらで良いから良く聞くように、そして今から全員に告げる。この鎮守府に向かって深海棲艦が攻めてきた。今から名前を出す人は迎撃にしろ。

高雄、鈴谷、龍田、吹雪、電、夕立、名前を出された者は執務室には来なくて良いからそのまま出撃するように、なお今回の出撃の旗艦は高雄とする。出撃する者は絶対に生きて帰って来い。死ぬ事は許さん。かすり傷でも当たったら帰って来い。まだまだ戦えるって思っても帰って来い。絶対に無理をするな。相手が逃げようとしている者は追うな。無理に追いかかけようとすればコチラに被害が出る。

名前を出さなかった者は鎮守府の警備と警戒の為に待機だ。名前を出さなかった組の旗艦は秘書艦の長門とする。

それじゃあ高雄……絶対に帰って来い、死ぬのは俺が許さないからな。

わかりました。私達は全員が無事に生き残って提督の所に帰ってきます。

よし、それでは行け。高雄

はい、わかりました。それでは高雄型1番艦 重巡洋艦 高雄いきます。

高雄が執務室から出ていく姿を確認すると俺は秘書艦の長門に指示を出した。

長門は今から名前を出さなかった人達を全員、鎮守府の入口に集めていつ来てでもいいように撃てる準備をしておけ

わかった。それでは私も失礼する。

俺は長門に指示を出して長門が執務室を出ると俺は1人になったので外を見て今の状況を見ていた。

頼むぞ、みんな生きて帰って来いよ。

俺は不安になりながらも全員が無事である事を祈っていた。

第36話

俺は長門に指示を出した後、鎮守府の入口に走っていった。そしたら待機組の全員が揃っていたので俺は指示を出す事にした。

みんな聞いてくれ、出撃した人達の全員が行ってくれたと言っても、いくつかはコツチを攻めてくるだろう。俺達は出撃した人達が仕留め損なった、あるいは仕留められなかった深海を叩く事にする。絶対に油断するな、慢心するな、傲慢になるな、いいな。

はい、わかりました

それでは全員いつでも撃てるように準備だけは、しておけ。

了解しました。

けど高雄達は無事かな??

私は提督に旗艦を任せられて出撃した全員と進んでいた。しばらくすると深海棲艦が見えてきた。

高雄さん、深海棲艦は私達に気づいていません。

吹雪が、その事に気づくと私はチャンスだと思い全員に攻撃の指示を出した。

「全員、攻撃を開始してください」

当たってください。

沈めるっばい

私の指示により全員が攻撃を開始して深海棲艦達に攻撃が当たると深海棲艦は慌てたようにしながらコチラに気がついた。

少しでも深海棲艦の数を減らす為にも今は出来るだけ減らしておかなければ……

私達は攻撃し続けた。

その中で今の私達はホ級、イ級、ト級、二級を一気に沈めた。

後はル級、レ級、ヲ級、チ級の4種類だけとなった。

お返しと言わんばかりに深海棲艦が反撃をしてくるが私達は余裕で避けられた。

あの時は練習だったからか良くわからない所も、ありましたが、こんな簡単に避けられるとは思いませんでした。しかし私達全員は今の所は無傷だけど提督の言うように油断せずに慢心せずに傲慢にもならず注意しながら戦っていた。

高雄さん、ル級が逃げようとしています。

私はル級が今どこにいるのかを確認する為に全体を見ていた。

私はル級を攻撃しようとした瞬間にレ級とヲ級とチ級が私を狙ってきた。

私は急いで避けようとしたが、すぐには動けなかつたので当たると思った瞬間に誰かが私の腕を引いてくれたから危なかつた。

高雄、大丈夫？

どうやら鈴谷が私を助けてくれたみたいなので私は、お礼を言った。

危ない所を助けてくれてありがとう

どういたしまして

私は鈴谷にお礼を言っているとその間にレ級とチ級とヲ級を何とか沈める事が出来た。

みんな大丈夫？

私は自分が当たりそうになったにも関わらず他の人を心配していた。

私達は大丈夫です。

すいません、ル級を見失いました。

探しに行くつばい？

いいえ、提督は追いかけないようにつとってたので引き返しましょう。
私は全員に戻るように話かけようとしたら提督から連絡が来た。

全員無事か？

はい、途中で当たりそうになりましたが私達は全員、無傷です。

そうか、出撃した全員は帰ってくる時は気を付けて……あつアレは
提督、どうしました？

ル級が攻めてきた。しかも、もうすぐコチラに向かって来る。出撃した全員は急いで
帰ってきてくれ。

わかりました。急いで引き返します。

みんな今の話を聞きましたね。これから急いで戻ります。全員、私に続くように

了解

私達は提督から連絡を聞いた後に提督のいる鎮守府に急いで進んで行った。

第37話

俺は今、待機・警戒組にさせていた秘書艦の長門達と一緒にいた。

高雄そちらにいた深海は全部沈めたのか？

はい私達が全員で何とか沈めましたがル級だけは見失ってしまったんです。

そうか……。わかった。なら気を付けて来るようにな

はい、わかりました。

俺は高雄からの話を聞くと全員に話をした。

全員俺の話を聞いてくれ。高雄達がル級意外は全部倒したみたいだ。

俺達は残りル級を沈めるだけだが相手は1人と言つても絶対に油断するな、慢心するな、傲慢にもなるな、いいな

了解

よしル級が見えてきたぞ。全弾使つても構わない今だ、攻撃を開始しろ。
了解。

俺達は全員この戦いに勝つて生き残つてみせる、全員、長門型1番艦戦艦長門に続けええ

長門型1番艦戦艦長門、殴りあいなら任せておけ、全員私に付いてこい

了解

俺は秘書艦の長門を先頭に全員が向かっていた。

長門達がル級を沈める為に俺から離れた後に高雄達が帰ってきてくれた。

もう俺が自分の目で高雄達が見える距離にいる。

高雄達も俺が今いる場所を確認したようで俺の所に向かっている。

長門達はル級と戦っていてル級に攻撃を当てるとル級が反撃してきたが長門達は避ける練習をさせていたからか、ちゃんと被弾せずに避けた。

見てて安心したが何だろう？この嫌な感じは……俺の気のせいであってほしいが……

俺が、そう思っていると高雄達が俺の所に来た。

全員無事か？

はい、私達は全員大丈夫です。

なら良かった。そしたら全員悪いが、このまま長門達の所に行き今から援護を……

そう思って俺が長門達を見た時にル級が高雄を狙っていた。

ル級は高雄をなぜ狙うのか？を考えたが高雄達はル級は見失ったが他の深海は全部沈めたからか警戒したのだろう。

ル級は高雄を狙って攻撃した。

高雄危ない

俺は必死になりながらも高雄を突き飛ばした。高雄は突き飛ばした事で倒れてしまった。

提督いったい何を……

俺はル級の攻撃を左腕に受けてしまった。

すると俺の左腕が空中に上がりしばらくしてから地面に落ちた。

俺は何かの間違いだと思ったが俺はソレが俺の左腕だと認識した。

「あっ……あっ……あっ……あっ……あっ……あっ……あっ……あっ……」

ああああああああああああああああああああああああああああああ

俺は激痛を感じて倒れてしまった。

提督

提督

私は提督に突き飛ばされてしまい倒れてしまった。

提督は私を突き飛ばすトル級の攻撃を受けてしまった。

私達はソレが提督の左腕だと認識すると提督が声を出した。

私が気づかなかったせいで……私達が沈められなかったから提督がケガを
しました。

私は提督が倒れてしまったのを確認すると私達は提督に近づいていった。

私の名前は戦艦長門だ。

私達は今ル級と戦っていたがル級が私達では無く違う場所に狙っていた。

私はル級がドコを狙っているのかを見るとル級は高雄を狙っていた。私はル級が攻
撃をする前にル級を攻撃しようとしたがル級の方が先に攻撃をしてしまった。

提督が高雄を突き飛ばすと高雄は倒れてしまったが提督がル級の攻撃を受けてし
まった。そして私は提督のナニかが空中に上がるのを見た。私はソレが提督の左腕だ
と認識した途端に一気にル級を攻撃した。

全員攻撃しろ。急げ

了解

ル級は何とか沈めたが提督の声を聞いて私は急いで戻った。

そしたら提督は左腕が無くなった状態で大量の血を流していて倒れていた。

第38話

私の名前は戦艦長門だ。深海棲艦が攻めて来てから3日が経った。

あの子の話だが私は提督の秘書艦だが提督が倒れてから次の日に提督は目を覚ました。

だが左腕が無くなった事で今は執務室で仕事も出来ないので提督は他の人達に頼んで義手を作って貰って今はリハビリの為に腕を動かす訓練をしている。

提督は左腕を使ってまず本を持つては置くを10回以上は繰り返し返して今度は腕立て伏せをやっていた。コレは左腕が動かしているか、ちゃんと確認する為にしている。

私は提督代理を高雄は私の秘書艦をして貰っている。

あの子の話だが高雄は自分のせいで提督にケガをさせたと思っけししまい戦いが終

わった後に次の日は丸一日部屋から出て来なくなってしまった。

私は、この日一人で提督代理をして執務室で仕事をしながら一日を終わらせた。

食事は鈴谷が持つて来てくれた。

しかし仮に提督がケガをする前ぐらいに腕を動かせるようになったとしてコレから先は大丈夫なのか？と私は思っていた。

今の俺は左腕のリハビリをしていた。なぜ俺が今リハビリをしているかって言うと俺の秘書艦の長門から聞いた話だが俺は左腕を失った後に大量の血を流して倒れてしまったらしい。そして丸一日を俺は寝ていたと聞いた。

左腕についてはリハビリをすればケガをする前ぐらいまでに動かせるって話を聞いたので俺は動かすようにしている。

だが腕のリハビリは正直に言うときツイ。まず握力が入らない。握力が無いと何かを持った時にすぐ落としてしまうからだ。

俺は落としても大丈夫な本から、まず持ってみた。

本なら何回落としても大丈夫だがコップとか皿だと落とすと割れてしまうから持たない事になっている。

俺は本を持つては置いてを繰り返しながらリハビリに専念している。長門と高雄には本当に感謝している。本来ならば俺が、やらなければならぬ事をやってもらっているのだから……

しかし俺は今リハビリは辛いけど頑張っている。何故なら俺は今やっているリハビリが完全に終わってケガをする前ぐらいに腕を動かせるようになってまた執務室で仕事出来るようになったら俺は執務室の机に、しまつてある指輪を渡すつもりだからだ。ケツコン・カツコカリについて俺は気になっていたからだ。

けど俺は考えていた。指輪を渡せるのは今の俺の鎮守府には2人だけしかないって事を……

だけど2人とも俺を支えてくれた。2人が、いなければ俺は、すぐにも辞めていた
　　だろう。それでも俺は考えていた。2人の内の誰かを選ぶとしたら誰を選ぶのか？良
　　く考えてから5分後に俺は指輪を渡す人を決めた。その人の名前は・・・

ケツコン・カッコカリ（Aルート）

俺は今から指輪を渡す人の名前を使って呼び出した。

呼び出しをしてから10分後に執務室のドアをノックする音が聞こえたので返事をすると、その人は来てくれた。

「提督どうかしたのか？」

俺が呼んだ人は……長門だった。

「実は長門に受け取って欲しい物があるんだ。」

「受け取って欲しい物？それは、いったい何なんだ」

「コッチに来てくれ長門」

長門が俺の目の前に来ると俺は長門に渡した。

「長門……コレを受け取ってくれ」

私は提督に呼ばれて執務室に向かい執務室の中に入ると提督が来るように行つたので行くとき提督は私に何かを渡してきた。私は中を見てみるとその中に入っていたのは指輪だった。さすがに私も驚いてしまった。

「見てわかるかも知れないが俺は長門が好きだ。長門……俺とケツコンしてくれないか?」

「私でいいのか?」

「ああ……俺は長門がいいんだ。」

「私は提督が選ぶとしたら高雄だと思っていたんだがな」

「正直に言うと長門と高雄で俺の気持ちは迷っていたよ。」

「ならなぜ私を？」

「俺が長門を選んだのは、まあ簡単な理由なんだが俺の隣にいて欲しいからだよ」

「提督の隣にだと？」

「まだ俺と長門と高雄の3人だけしか、いなかった時の事を覚えているか？」

「覚えている」

「その時は今みたいに人が、いなかったから仕方なかったが何かをするにしても時間かかるし俺達3人しかいなかったから出来ない場所も、あつたらろ？」

「確かに……人数が少なくて出来ない場所が、あつたな」

「それから何日か経って、ようやく今みたいに人数が少しずつ増えてきたけど俺の隣に

は、いつも長門が、いてくれた。長門が隣に、いる時は安心して任せられるし頼りにもしているんだよ。」

「提督は私をそのように思っていたのか？」

「もちろんだ。俺から見て長門は信用と信頼も、しているからな。だからこそ俺は長門を選んだのだから……もう一度だけ言うぞ。俺とケツコンしてくれ」

「ああ……わかった。この指輪を受け取ろう」

それから10年後……

「お父さん」

「どうしたんだ？ 湊（みなと）」

「一緒に遊ぼう」

「そうだな、一緒に遊ぶとしようか」

俺は湊と一緒に遊ぼうとしたら執務室からノックの音が聞こえたので返事をする
と長門が入ってきた。

「提督」

「長門か？どうかしたか？」

「湊が間宮に料理を教えてほしいって頼んでるみたいなんだが……」

「まだダメだ。あと5年ぐらい経ったら教えてやれつと言つていてくれ。まだ小さいか
ら火の使い方とか切るやり方は危ないから、まださせたくないからな」

「わかった。そう言っておこう」

「長門……今お前は幸せか？」

「ああ・・・幸せだ」

「お父さん、お母さん」

「湊が呼んでいるな、よし行くか」

「そうだな、一緒に行こう」

俺は歩きながら、コレからも俺達家族3人が、いつまでも仲良く暮らしていけますようにと願っていた。

ケツコン・カッコカリ（Bルート）

俺は今から指輪を渡す人の名前を使って呼び出した。

呼び出しをしてから10分後に執務室のドアをノックする音が聞こえたので返事をする、その人は来てくれた。

「提督どうかしましたか？」

俺が呼んだ人は……高雄だった。

「実は高雄に受け取って欲しい物があるんだ。」

「受け取って欲しい物ですか？それは、いったい何なんですか」

「コッチに来てくれ高雄」

高雄が俺の目の前に来ると俺は高雄に渡した。

「高雄……コレを受け取ってくれ」

私は提督に呼ばれたので執務室に向かい執務室の中に入ると提督が来るように行ったので行くと言提督は私に何かを渡してきました。私は中を見てみるとその中に入っていたのは指輪でした。さすがに私も驚いてしまいました。

「見てわかるかも知れないが俺は高雄が好きだ。高雄……俺とケツコンしてくれないか?」

「申し訳ありませんが私は、この指輪を受け取れません」

「理由を聞いてもいいか?」

「私は自分のミスで提督にケガをさせてしまいました。しかも左腕を失うっていう大きなケガをです。」

「……………」

「それなのにケガをさせてしまった私が提督から指輪を受けとる資格なんかありません。渡すのでしたら長門に渡してください。長門は提督の事が大好きですから受け取ってくれるはずですよ」

「じゃあ正直に言つてやるよ。確かに、あの時お前がミスをしなければ俺は左腕を失わなかったかも知れない」

「……………」

「だけどな高雄お前はまだ俺達3人だけしか、いなかった時の事を覚えているか?」

「はい覚えていきます。」

「あの時は今と違って人数が少なかったから毎日2人に頼みっぱなしだったけど今は人数が増えて掃除が出来なかった場所も出来るようになったけど何かを頼む時は高雄に

頼んでいるだろう？それは俺が高雄を信頼しているからだ。だから俺は安心していられるし頼る事も出来るし任せられるんだよ」

「それでも俺は高雄が好きだから言ってるんだ。だから俺は、もう1度だけ言うぞ。俺とケツコンしてくれ」

「本当に私でいいんですか？」

「ああ」

「嬉しいです。わかりました。不束者ですが、よろしくお願いします」

「(こちらこそ、改めてよろしくな高雄)」

それから10年後

「お母さん」

「どうしたの真理（マリ）」

「お父さんが呼んでたよ」

「そうなの？教えてくれてありがとう。じゃあ、お母さんは、お父さんの所に行くから長門お姉さんの所にいてね。」

「うん、わかった。」

私は真理に言われたので提督が普段いる執務室に向かって歩いていった。

執務室に着いたのでノックをすると返事が無かったのでアレ？っと思った私は、もう1度ノックをした。それでも返事が無かったので私は執務室に入ろうとしたらカギは閉めていなかったみたいで簡単に開きました。中に入ると執務室には私の他に誰も、いませんでした。じゃあ隣の部屋かと思ってドアをノックすると返事が聞こえてきたので私は提督の部屋に入りました。

「めずらしいですね。執務室ではなく部屋にいるなんて」

「ああ……ちよつと探し物をな」

私は何だろう？つと思っていると提督が私に何かを渡してきた。

「コレは……アルバムですか？」

「そうだ。真理が今年で10歳になるからな。しかも見てみろよ。産まれた時から今日までの間に大切な時にはカメラを使って写真をアルバムに入れてるから良くわかるんだよ。」

「コレは桜が、ありますから4月ですね。」

「そうそう、それじゃあコレは？」

「雪ダルマが、ありますから12月でしようか？」

「そうだ。しかも何年の何月の何日か書いてあるからな、忘れないし」

「コレだったら忘れませんね」

「真理が、いつまでも元気で、いられるように俺は願うよ」

「私も願いますよ」

「さてと高雄、真理と一緒に家族3人で間宮のゴハンでも食べようか」

「もうそんな時間ですか？そうですね、そうしましょう」

俺は歩きながら俺達3人はコレからも家族3人で仲良く過ごせますようにっと願いながら歩いていきました。